

【論 説】

条約無効と抵抗権—‘1905 年保護条約’ と関連して*

笹 川 紀 勝

目 次

はじめに一検討課題としての訊問調書における安重根の答弁：国際法と抵抗の論理
第 1 部 分析の前提として

1. ティランという言葉とアリストテレスの三種類のティラン

(1) ティランはギリシャ語に由来するか

① カントとドイツ語の **Tyrann**

② 王とティラスの比較

(2) アリストテレス：三種類のティラン

① アリストテレス『政治学』

② シリング他の研究から

2. 中世の事件をめぐる議論の概観

(1) フィンケの研究から

① 教会会議におけるティラニスの議論

② ドゥールの書評

③ トマスの資料の分析

(2) エルコレの研究から

(3) ショウエンシュテットの研究から

第 2 部 近世におけるバルトルスの受け入れ方：基礎研究

1. バルトルス「ティラニア論稿」とは何か

(1) ティラン概念の二つの区別

(2) 「ティラニア論稿」の構成の概観

(3) 「ティラニア論稿」の主要箇所：資料として

(4) 「ティラニア論稿」に基づくコメント

① ギリシャ語に由来するティラス

* 本稿は、2015 年 11 月 20 日ソウルに於て開催された「1905 年保護条約」をめぐる国際会議（「1905 年『保護条約』、世界史的再検証」The Protectorate Treaty of 1905. The World-Historical Review; The International Conference on 110th Year of Eulsa Treaty）における報告に加筆補正を加えたものである。

- ② 「法によらずに支配する」ティラヌス
 - ③ 「高慢」というティラヌス
 - ④ 今日まで影響する定義
 - ⑤ ティラヌスの異なる表現
2. バルトルスの受け入れと展開
- (1) バルトルスの現れる文献
 - ① プルトゥス『ヴィンディキアエ』 1579 について
 - ② プルトゥス『ヴィンディキアエ』における二つのティラヌス論
 - ③ ティラヌス論と抵抗権論
 - (2) ボダン『国家 6 篇』 1583/1577 について
 - ① ボダンにおけるバルトルス
 - ② ボダン『国家 6 篇』第 4 章第 5 章
 - (3) アルトジウス『政治学』 1614/1610/1603 について
 - ① アルトジウス『政治学』 1603 年初版
 - ② アルトジウス『政治学』 1614 年第 3 版第 38 章第 68 節
- 第 3 部 結びにかえて—バルトルス「ティラニア論稿」の射程：侵略
1. 宗教改革の時代から
- (1) カルヴァン：ボハテツの研究から
 - ① カルヴァンの「^{latrones}盗賊」とトマスの「^{latrones}強盗」はラテン語では同じ
 - ② カルヴァンの「^{latrones}盗賊」と「^{latrocinium}盗賊集団」の相違
 - ③ カルヴァンの「盗賊集団」は侵略者^{ティラヌス}
 - (2) アルトジウスの国家論における「僭主」侵略の位置づけ
2. カントの侵略戦争に関して
3. 「レジスタンス」と義兵としての安重根
- (1) 「レジスタンス」の項目の登場
 - (2) 侵略への抵抗：安重根
 - (3) 今日の日本への問いと抵抗の基礎
 - ① 安倍政権・日本会議の憲法改正論と日本国憲法 99 条の憲法尊重擁護義務
 - ② 憲法 12 条の「濫用」の解釈学説
 - ③ 議員の法的性格の吟味—「濫用」の実例と政治的義務の実践

はじめに一検討課題としての訊問調書における安重根の答弁：国際法と抵抗の論理

1905 年の日韓保護条約締結の場面の様子が今日明らかになってきて、同条約は、当時の伝統的な国際法によると日本の韓国の代表者に対する条約締結強制によって無効といわざるを得ない⁽¹⁾。そして、正義論に基づく現代的な国際法によって

(1) 笹川紀勝「伝統的国際法時代における日韓旧条約（1904–1910）—条約強制をめぐる法

も今日日韓保護条約締結強制無効が論証されている⁽²⁾。それゆえに、もはや同条約の合法有効を主張することは学問的には難しい。

1. 私は、伝統的な国際法の理解に即して一つの事件について議論したい。具体的には安重根^{アンジュンゲン}（1879–1910）が1905年保護条約を訊問調査におけるように理解していた⁽³⁾ことを手がかりに述べよう。すなわち、安重根は1909年10月26日哈爾賓駅頭で伊藤博文（1841–1909）を射殺して逮捕された。高等法院検察官溝淵孝雄は、殺人被告事件として哈爾賓と旅順において同年10月30日から訊問を始めた。訊問調査によると、検察官がなぜ伊藤公爵を「敵視」するかと問うたところ、安重根は15項目に渡って「伊藤サンヲ殺シ」た原因を述べている⁽⁴⁾。ここで注目したい点は第2項目である。すなわち「今ヨリ五年前伊藤サンハ兵力ヲ以テ五ヶ条ノ条約ヲ締結セラレマシタガ夫レハ皆韓国ニ取りテハ非常ナル不利益ノ箇条デアリマス」⁽⁵⁾。これによると、1905年の日韓保護条約^{ウルサ}=乙巳条約は、伊藤

的な論争点」笹川紀勝・李泰鎮編著『国際共同研究 韓国併合と現代 歴史と国際法からの再検討』明石書店、2008年、484頁以下参照。

- (2) 李根寛「国際条約法上の強迫理論の再検討—日本の韓国併合と関連して」『韓国併合と現代』407頁以下参照。同「日本の韓国併合に関する国際法的再検討—併合の違法性の有無と『請求権協定』を中心に」笹川・邊英浩監修都時煥編著『国際共同研究 韓国強制併合100年 歴史と課題』明石書店、2013年、329頁以下参照。
- (3) 外務省外交史料館所蔵『伊藤公爵満州視察一件』第3部は「別冊」として安重根他に対する「訊問調査」すなわち「聴取書」である。その訊問調査は、今日CDによって利用可能である。CD5枚によって複写すなわちピクチャが作成されている。1ピクチャは資料である原本の見開き2頁に相当する。そこでピクチャは「p」で表し、左右頁を区別する必要がある場合には左頁、右頁として表す。なお、「別冊」の表紙のpから98枚目のpまではナンバリングはない。そして、99枚目のpから最後の枚数のpまでナンバリングがあり、最後のpのナンバリングは1347である。そのために、ナンバリングのないところは「p [1]」のように表記する。したがって、ナンバリングのない範囲はp [1–98]であり、ナンバリングのある範囲はp99–1347である。例えば、「被告人安応七」の第2回訊問調査はp [38] 左頁から始まる。さらに、先行研究として市川正明編『安重根と日韓関係史』原書房、1979年（＝市川編）も訊問調査を収録している。なお、訊問調査といわれるものはいくつかあるが、未だ校訂本はなく、そのうえどれが訊問調査の原本かはっきりしない。私は安重根の裁判の訊問調査の第一次資料すなわち原本は上記「別冊」と判断している。この判断については笹川「国際協調主義と歴史の反省—安重根とカントの思想の比較研究—」笹川編著『憲法の国際協調主義の展開—ヨーロッパの動向と日本の課題—』敬文堂、2012年（＝笹川「国際協調主義と歴史の反省」）230頁以下参照。
- (4) 第1回訊問調査：『聴取書』p [19] 右頁。15項目はp [16] 左一 [19] 右頁にある。市川編、213頁参照。
- (5) 第1回訊問調査：『聴取書』p [16] 左一 [17] 右頁。

が「兵力」で「締結セラレマシタ」すなわち強制したものであると解釈される。そして、「強制」の言葉自体はたしかに安重根が用いている。すなわち、保護条約は「伊藤ガ兵力ヲ以テ皇上ニ迫リ強制シテ承諾セシメタノデアリマス⁽⁶⁾」。かかる認識は「人カラ聞イタノテハアリマセヌ大韓毎日新聞、皇城新聞、帝国新聞、米國ニ於テ発行スル共立新聞又浦潮ニ於テ発行スル大東共報トノ論説ヲ讀ンテ右ノ如キ考ヘガ起リマシタ」⁽⁷⁾といわれるから、彼の認識は、一人彼だけでなく幅広く韓国民の間に浸透した結果であることがわかる。

そして、非常に興味深いことに、検察官と安重根との間には、条約締結の強制に関する効果に関して正反対の意見が現れている。それを見てみよう。以下「問」は検察官溝淵孝雄のいうところであり、「答」は安重根のいうところである。すなわち⁽⁸⁾

問：韓国ノ独立ガ出来ヌカラ之ニ迫ツテ協約セシメタノデ条約ガ強迫ニ依テ成立スル例ハ沢山デ決シテ不法デナキノミナラズ当然デアルガ如何

答：夫レハ左様デスモ伊藤ガ韓国民ガ希望デアルカラ保護シテ居ルト申シテ日本皇帝ヲ初メ日本人民ヲ欺イテ居リマスカラ伊藤ヲ殺セハ日本モ自覺スルデアロウト思フテ伊藤ヲ殺シマシタ

問 若シ支那ハ勿論露國ニ對抗スルカナキ韓国ヲ其儘放置セハ滅亡スルノ他ハナイ之即チ東洋平和ニ害ガアルノデ日本ガ保護シテ居ルノテアル其方ハ其理カ判ツテ居ラス様思フガ如何

答：結局伊藤ノ務方⁽⁹⁾ガ悪イ為メ韓国ハ今日ノ状態ニ至ツタノデ若シ奸策、強制ヲ加ヘネハ無論東洋ハ至ツテ平和ニ為ツテ居ル事ト思ハレマス

息詰まる緊張の場面で、明らかに、安重根は検察官の条約締結強制の合法有効の法論理を逆手にとって検察官とは逆の結論を引き出している。つまり、条約締結強制の違法無効を主張している。少し検討してみると、その結論を引き出すために、

(6) 第 6 回訊問調書：『聴取書』 p167 左頁。市川編、336 頁参照。

(7) 第 1 回訊問調書：『聴取書』 p [21] 左頁。市川編、214 頁参照。

(8) 第 6 回訊問調書：『聴取書』 p168 右一左頁。市川編、336-337 頁参照。

(9) 市川編、336 頁は崩し字「務方」を「やり方」と解している。意味はそれでよいであろうが崩し字の読み方としてはどうかと思う。というのは、同じ崩し字がここ（第 1 回訊問調書：『聴取書』 p [21] 左頁）では「やり方」で、他のところ（第 6 回訊問調書：『聴取書』 p168 左頁）では「遣り方」となっていて崩し字の理解が一貫していないように思われるからである。

彼は二つの理由を指摘している。一つには、韓国人民の希望によって保護しているというがそれは日本皇帝と日本人民を欺いている。もう一つには、伊藤は実際には韓国人民の保護をしていないから、韓国は「不利益」を受けている。彼はこうもいっている。すなわち「伊藤サンハ韓国ニ対シ保護ヲシタ実ハ少シモアリマセヌ⁽¹⁰⁾」。こうして、たしかに「法」が何であるかの特定はないが検察官のいう「不法でない」という主張に対してまさに「不法である」つまり違法であると反論している。したがって、安重根は、全体としては、伝統的国际法における条約締結強制の違法無効に沿って論じていると評価できる。この鋭い視点と反論には驚かされる。

2. 以上のように訊問調書における安重根の意見を見たところ、二つの論点がある。第1に、1905年の韓国保護条約は、韓国に対する日本の条約強制で違法無効であるという彼の国際法の認識が浮かび上がる。第2に、日本の侵略によって韓国国民は不利益を受けているからそれを正そうとする安重根の抵抗の論理がある。

本稿は第2の点を検討したい。というのは、安重根が伊藤博文を殺害したのは刑法上の犯罪であるという理解が日本社会に相当に広まっていて、彼が伊藤博文の侵略に抵抗するために殺害したという事実はもっと理解されるべきだからである。そして、安重根が抵抗したことを西欧的な抵抗権の思想から考えるとなるとさらに日本人の理解は乏しいからである。そうであれば、数の大小、勢力の強弱、多数派の関心の濃度から考えるのではなく、安重根の行動を、その内側から理解する試みとして、西欧的な抵抗権の思想から理解する研究にはそれなりに意味があるはずだからである。

本稿で用いる「抵抗」「抵抗権」に関して一言しておきたい。なお、「抵抗」は事実に表現であり、「抵抗権」は「抵抗」を正当化する法的表現であるが、時に両語は混用される。さて、本稿は、既存の法秩序を前提して（ただし被侵略国の回復されるべき法秩序を含むが、どこまでさかのぼるか不明のため廃止された王政復古は含まない）、時の権力者の権限の「濫用」（権利侵害だけでなく大小の法秩序の侵害）に対する不服従や批判から実力行使まで含む人々の言動を支える幅広い概念として「抵抗」「抵抗権」を用い、必ずしも後刻法的制裁を免除されるとは限らないものと解する。その抵抗の主体は、個人から集団まであり、そして濫用を阻止する法的権限を有する者と有しない者を含む。また、言い換えるとその形態は、受動

(10) 第6回訊問調書：『聴取書』p171右頁。市川編、337頁参照。

的なもの（非暴力的な不服従、批判、代替的な新秩序の創設の試みなど）から積極的なもの（実力行使に及ぶ戦闘、暗殺、革命など）までである。本稿注 16 参照。

ところで、抵抗権の思想的な歴史を振り返ると、古代ギリシャの議論から始めることが常道らしく、現代までつながるいわば太い線があるはずである。それを探りたい。そうした関心からすると、抵抗する者が相手方を殺害することには賛否が常にあったことが想い起こされる。安重根についてもそういうことになる。はたしてそれで終わりにしてよいかどうか。

ところで、最近の研究⁽¹¹⁾では、ツルシェチ (Turchetti) は、despotism と tyranny の区別はあいまいで政治学の用語としては「消されてしまった」(have been eliminated) といい、18 世紀以降、モンテスキュー (Montesquieu, 1689–1755) やルソー (Rousseau, 1712–1778) におけるように、despotism の方は明確な内容を持っているが、暴君殺害 (tyrannicide) とかわる tyranny の概念は明確でないという。しかし、彼は、「明確なタイラントに関する以外には」(except as regards a ‘manifest’ tyrant) 暴君殺害は正当でないともいう。そうであれば、「明確なタイラント」に対しては殺害は肯定されるから、その「明確な」とはどういうことか。これについてはツルシェチの解説は見当たらない。

たしかに、ツルシェチの主著⁽¹²⁾は、古代から現代まで 2500 年間におけるティランを網羅的に調べて、百科事典のようである。そして、彼はたしかにパルトルスという言葉として le tyran manifeste (apertus et manifestus) に言及している（但彼の引用するラテン語句の出典を確認できない）。そうすると、後述するように、パルトルスは心の内側で「隠されている」(velatus, & tacitus) と対比的に manifestus を用いているが、ツルシェチは apertus 「開かれた、公開の、あらわな；閉鎖されていない；公表の」⁽¹³⁾ 言葉を manifestus と対比的に使っているわけではなく、むしろ apertus を外部に現われたところで解釈して、明確なという manifestus を強調しているように思われる。言い換えるなら、ツルシェチは、

(11) Mario Turchetti, ‘Despotism’ and ‘Tyranny’, *Unmasking a Tenacious Confusion*, *European Journal of Political Theory*, 2015, p.159 and 172.

(12) Mario Turchetti, *Tyrannie et tyrannicide de l’Antiquité à nos jours*, *Fondements de la politique*, 2001, p.296.

(13) 田中秀央『増補改訂 羅和辞典』研究社、1966/1952 年、43 頁。

apertus et manifestus すなわち「あらわなそして明確な」⁽¹⁴⁾というとき、バルトルスのように「隠されている」と対比的に明確なを定義しているとは考えにくい。そうするなら、後述するように、バルトルスは「ティラヌスの現実」はたくさんある（Multi alij sunt actus Tyrannici）⁽¹⁵⁾というから、ツルシエチが明確なタイラントの殺害を肯定するときには「ティラヌスの現実」のすべてが暴君殺害の対象になるというのかどうか、そこまではいっていないかもしれないのでその使う明確なという言葉にはあいまいさがつきまわっているのではないであろうか。また、彼はタイラントと侵略の関係については言及しないで一国内で考えている。

ところで、ヒトラー（Hitler, 1889–1945）に抵抗したドイツ人の実相が明らかになってきて、キリスト教神学者ボンヘファー（Bonhoeffer, 1906–1945）もかわった1944年7月20日の国防軍将校による暗殺計画失敗が有名だが、それだけでなく、すべて失敗に終わったヒトラーに対する殺害計画は40件以上あったといわれる⁽¹⁶⁾。ヒトラーに抵抗したフランスや東欧の状況も今日知られている。そして、日本の朝鮮侵略に対して天皇等主要人物への暗殺を計画実行した朝鮮人の李奉昌（イボンチャン、桜田門事件、1932年1月）や尹奉吉（ユンボンギル、上海天長節爆弾事件、1932年4月。これを契機に蒋介石は上海における朝鮮臨時政府へ支援をした）などの事件があった⁽¹⁷⁾。また、朝鮮人が中国大陆で日本の侵略に武力抵抗した朝鮮義勇隊（重慶1938年10月10日創設）の隊員の例もあった⁽¹⁸⁾。そのように、安重根に続く侵略への抵抗として暗殺や武力行使などがあったことは記憶されるべきである。

そうするなら、20世紀のファシズム・軍国主義への世界的な戦いの歴史を暗殺にかかわって点検することは、無視してはならないあるいは忘れてはならない歴史の事実にかかわり、日本のアジア近隣諸国との未来の友好関係の構築のためにはその記憶と分析は大切ではないかと思う。そのために、ツルシエチのいうように、あ

(14) ツルシエチはイタリア語の文献 Bartolo, De tyranno, ed. Quaglioni, p.188 を引用する。

(15) Bartolus, *ibid.*, p.322.

(16) “Attentate auf Hitler”, in: Peter Steinbach und Johannes Tuchel, Hrsg. von, Lexikon des Widerstandes 1933–1945, Becksche Reihe, 1994, S.13f. und *ibid.*, 2. Aufl., 1998, S.14f.; “Attentate auf Hitler”, in: Wolfgang Benz und Walter H. Pehle, Hrsg. von, Lexikon des deutschen Widerstandes, Fischer 2001/1994, S.165f.

(17) 石村修「『尹奉吉事件』軍法会議判決」専修大学今村法律研究室報、2008. 3. 10、No.49, p.1 以下。

(18) 笹川「朝鮮義勇隊員の事例と日本の侵略に対する抵抗」法律論叢第87巻第2・3合併号、明治大学法律研究所、2014年12月、180頁以下参照。

いまいな概念だとしても抵抗権の研究でティラヌスに対する集中した思索は本当に求められていて、したがって、安重根の抵抗を見直すにはティラヌスを明らかにすることは欠かせないを考える。

なお、抵抗権を実定法解釈論と結びつける研究はもちろんありうるが詳細は別な作業となる。これまた相当の労力を必要とする。

第1部 分析の前提として

1. ティランという言葉とアリストテレスの三種類のティラン

(1) ティランはギリシャ語に由来するか

① カントとドイツ語の **Tyrann**

私は、カント (Kant, 1724–1804) と安重根の思想を比較するために⁽¹⁹⁾、カント『永遠平和のために』を分析する過程でドイツ語の **Tyrann** の言葉に出会った。英語ではそれは **tyrant**、フランス語ではそれは **tyran** である。これらの語源はラテン語 **tyrannus** である。当分 **Tyrann** は「ティラン」で表わし日本語訳としての漢字表記は検討後に行うことにする。そして、資料がラテン語表記の場合、日本語文とラテン語文との対照に従って、ティラヌス (**tyrannus**)、ティラニス (**tyrannis**)、ティラニクス (**tyrannicus**)、ティラニケ (**tyrannice**) と表記する。

ところで、これらの言葉に共通するティラニスの語源はギリシャ語 τυραννος に由来し、そのローマ字表現では **tyrannos**⁽²⁰⁾ と表記される。ところが、**tyrannos**

(19) 笹川「国際協調主義と歴史の反省」、256 頁以下参照。

(20) Cf. Charlton T. Lewis and Charles Short, A Latin Dictionary, 1966/1879, p.1922 はラテン語 **tyrannus** はギリシャ語 τυραννος (**tyrannos**) に由来するという。Charlton T. Lewis, An Elementary Latin Dictionary, 1966/1891, p.883 も同じである。そして、Menge - Güthling, Langenscheidts Großwörterbuch, Lateinisch- Deutsch, 1977/1911, S.773 もまたラテン語 **tyrannus** はギリシャ語 τυραννος (**tyrannos**) に由来する「外来語」(Fw) であるという。Langenscheidts Taschenwörterbuch, Lateinisch- Deutsch, 1979/1963, S.539 も「ギリシャ語の外来語」であるという。さらに、これらの辞書はラテン語 **tyrannis** も「外来語」で τυραννις に由来するという。したがって、ラテン語の **tyrannus** も **tyrannis** もギリシャ語に由来するから、**tyrannos** を **tyrannus** や **tyrannis** の活用から考えることはできない。

自体はギリシャ語ではなく前ギリシャ語で小アジア地方に由来するといわれる。手元の文献では二つの説がある。

一つはアンドリュウス（Andrewes）説である。すなわち、「*tyrannos*という言葉はアーキロカス（Archilochus：前7世紀の詩人）の時代にリディア（Lydia：小アジア西部の古代王国）の王を殺害して自己のために王座を奪ったガイジズ（Gyges：前8-7世紀）というリディア人にはじめて使われた」⁽²¹⁾。その場合、ギリシャ語の *tyrannos* は初めから「篡奪者」（*usurper*）を意味したが、その使い方では「もっとニュートラル」な意味をもっていた、事実アーキロカスは「王」（*king*）と同義語で使っていた。そして、*tyrannos* は今日それが意味する *odium*（憎しみ、敵意）と同じように使われた⁽²²⁾。

もう一つは、ベルヴェ（Berve）説である。*tyrannos* はギリシャ語ではない、前ギリシャ的あるいはアジア的起源をもつらしい。彼は、アンドリュウスを引用しているわけではないが、アーキロカスの言葉を使いながら次のようにいう⁽²³⁾。なお、「〔 〕」は以下私の補いを意味する。

「特に小アジアの奴隷の神メン（Men）には *Tyrannos* という別名がついていた。語源的には、この言葉の意味は、本当にどこにでもいるもの、すなわち『主人』（*eine recht allgemeine, nämlich 《Herr》*）であった。しかし、専制的（*despotisch*）という概念が初めから働いていたようである。」「ギリシャ人が外国人すなわちリディア人からその言い方を受け入れたという証拠はない」。それよりも「日常語としてよく知られていただろう。」「それは決して称号をもつものとして（*titular*）君主には使われなかったが、少なくとも、圧政的に脅かされた奴隷の眼から見て主人を特徴づけた。7世紀の前半には権力を有するものをティランと表わすことができただけでなく、ティランの概念が存在していた。」

語源の探求は専門家にゆだねざるを得ない⁽²⁴⁾。そこで、該当の箇所の説明の比

(21) A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, 1962/1956, pp.21-22.

(22) *Ibid.*, p.20.

(23) Helmut Berve, *Die Tyrannis bei den Griechen*, Erster Band: Darstellung, 1967, S.3. この書物には合阪学の書評（『西洋古典学研究』20巻、1972年（＝合阪）、139-120頁）がある。

(24) Friedrich Schoenstedt, *Der Tyrannenmord im spätmittelalter*, Studien zur Geschichte des Tyrannenbegriffs und der Tyrannenmordtheorie insbesondere in Frankreich, in: *Neue Deutsche Forschungen, Abteilung Mittelalterliche*

較をしてみると、アンドリュウスとベルヴェには、いささか異なるところと同様なところとがある。そこで、門外漢は途方に暮れることになるが、とりあえず評価の高いそして出版年の比較的後のベルヴェに即して以下述べて行きたい。

② 王とティラヌスの比較

ところで、関係の文献を読んでいると、王 (Rex) とティラヌスとの比較がしばしば取り上げられることに気付く。しかし、それは必ずしも分かりやすい話ではない。この点に関してベルヴェの 1954 年の論文⁽²⁵⁾ はギリシャに即していうので有益に思えるため紹介する。

小アジアから由来した Tyrannos は、「主人」(Herr) を意味した。それは東方に見られたように、「無制限な／絶対的な」(unbeschränkt) 支配者を意味した。「ギリシャ世界では当時王国は、一般にまだ存在する限りだが、すでに広範囲に権力を奪われていて、貴族社会の慣習と定めすなわちその法 (Nomos) に縛られていた。したがって、ティランは、この法を軽蔑する人を指すことが出来た。例えば、この者は、かかる法の限界を超え、正当な王がなしたであろうように、まったく不遜にも王国の全体を征服していた、彼は篡奪者として同国人に対する支配を暴力的に強奪した。ティランの性格は、現行法の侵害をなすことにある。その基盤は権力であって、法や慣習ではない。次の時代に、ポリスの統合が進み法律国家に発展すればするほどに、ティランはますます激しく法律国家の対抗者になりその敵と感じられた。」

この文章によれば、暴力の支配するティランと法の支配するポリスとは対比されている。それはもっと集約的に次のようにいわれる。すなわち

「責任意識をもった支配者としての王と残忍で利己的な支配者としてのティランの区別」がいわれた。また、「市民の意志に反し、法律的な拘束を受けることなく、恣意的に、社会の利益のためでなく自己の利益のために支配するものがティランであるというのが、ポリス全盛期の 5 世紀 4 世紀において一般的でしばしば表明された見解であった。」

Geschichte, Herausgegeben von Friedrich Baethgen, Band 6, 1938 (=Schoenstedt), S.26 は出典を示していないが Tyrann の語源として独裁者としての主人 (Herr) を表わす「リディア語」という。

(25) Helmut Berve, Wesenszüge der Griechischen Tyrannis, in: HZ 177, 1954, S.2ff.

それゆえに、ティランを「徹底して反ポリス的な権力」⁽²⁶⁾としてベルヴェが論じたといわれるのはもっともであろう。

(2) アリストテレス：三種類のティラン

① アリストテレス『政治学』

本稿のかかわりではアリストテレス（Aristoteles, BC 384–322）が τυραννις（tyrannis）について述べている⁽²⁷⁾ことは重要である。なお、アリストテレス『政治学』の翻訳者はティラニスを「僭主制」と訳している。アリストテレスは用語ではティラノスを使わない。

「何れも法律⁽²⁸⁾による」ものであるが、内容上二つある。すなわち、「自ら進んで従う意志のある者を独りで支配することの故に一方では王制的であり、また専制的に支配することと自分の判断に従って支配することとの故に他方において僭主制的であった」⁽²⁹⁾。

先に述べたベルヴェのティランの定義からすれば、「法律による」ものとは正当な王の支配（王制的）の統治形態である。そして、それからの墮落した統治形態が「王制的」なティランと「専制的」／「僭主的」なティランと二つある。したがって、アリストテレスの場合、「法律による」ものも、法律から逸脱して専制的な支配や自分の判断による支配に変わりうるといっているから、「法律による」ものの枠の中でこれら二つのティランが起きている。

次にアリストテレスはティランには「第3の種類」があるといっている。すなわち、

「しかし僭主制の第3の種類はもっとも完全に僭主制であると思われるもので、絶対的王制に対応する。このような僭主制は全く責任を問われずに自分と同様な者や優れた者の凡てを、支配される者の利益ではなくて、自分自身の利益を目当てにして支配する独裁制でなくてはならない。それ故それは支配される者の意志に反するものである。というのは自ら進んでは自由な人々のうちの誰

(26) 合阪、139頁。

(27) アリストテレス『政治学』山本光雄訳（岩波文庫、1967/1961）201–202頁。索引（前出、18頁）では日本語訳の「僭主」にギリシャ語 τυραννος が当てられ、同じく日本語訳の「僭主制」にギリシャ語 τυραννις が当てられている。なお、アリストテレス『政治学』牛田徳子訳、京都大学学術出版会、2001年207–208頁と同索引（前出22頁）参照。

(28) この「法律」は索引では「法、法律」でギリシャ語 νόμος が当てられている。

(29) アリストテレス『政治学』第4巻第10章1295aの14–19文。

一人このような支配を耐え忍びはしないからである」⁽³⁰⁾。

そうすると、アリストテレスが、「僭主制の第3の種類」は「最も完全な僭主制」「独裁制」であるという場合、その第3の種類はもはや法律とは関係なく自己の利益のためという一方の極に達している。彼ははっきり「第3の」種類があるといっているから、「法律による」王制的なティラン（第1のもの）、専制的／僭主的なティラン（第2のもの）、そして第3の種類である完全なティラン（第3のもの）というようにティランは三つで論じられている。

② シリング他の研究から

シリング (Schilling) は、アリストテレス『政治学』第3巻第7章、第4巻第10章、第5巻第10章を引用しながらトマス・アクィナス (Thomas Aquinas) (1225–1274) がアリストテレスの二つのティラン（第1と第2）に言及していると解説する⁽³¹⁾。だがよく見ると、そこでは「僭主制の第3の種類」の位置付けが見当たらない。そうであれば、アリストテレスのいう第3の完全なティランをどうとらえるかが課題になる。次にツルシェチは、たしかにアリストテレス『政治学』第4巻第10章 1295a 19–22 文を引用⁽³²⁾し「僭主制の第3の種類」に対応することを述べる。そうすると、第1と第2のティランはどうなるのか。そして、これまた大著であるサラキノ (Saracino) は、たしかにアリストテレス『政治学』第4章第10節と第5章第10–12節を引用する⁽³³⁾。しかし、その解説では「僭主制の第3の種類」への言及は見当たらない。そのために、ツルシェチとサラキノは対照的である。また、シュトラウス (Strauss) の翻訳でその序文⁽³⁴⁾では、「僭主政治は本質的に法律なき支配であり、あるいはもっと正確に述べるならば、法律なき君主支配である」とあり、「僭主政治は法律が不在であるがゆえに、それはまた実践においては自由の不在でもある」とある。ここではアリストテレスの引用があるわけではない

(30) 同上 19–22 文。

(31) Otto Schilling, *Die Staats- und Soziallehre des hl. Thomas v. A.*, 1923, S.95, note 4 und S.95–98.

(32) Mario Turchetti, *Tyrannie et tyrannicide de l'Antiquité à nos jours*, 2001, p.37.

(33) Stefano Saracino, *Tyrannis und Tyrannenmord bei Machiavelli, Zur Genese einer antitraditionellen Auffassung politischer Gewalt, politischer Ordnung und Herrschaftsmoral*, 2012, S.71.

(34) レオ・シュトラウス『僭主政治について』上、石崎嘉彦・飯島昇蔵・画一也訳、現代思潮新社、2006年、14頁。

が、シュトラウスには「僭主制の第3の種類」に近いものがあると感じられる。それゆえに、「僭主政治は本質的に法律なき支配」において考えられていて、法律による支配の下でもティランが生じうるというアリストテレスの幅の広いティランは「本質的」なものではないとなるだろう。

2. 中世の事件をめぐる議論の概観

(1) フィンケの研究から

① 教会会議におけるティラニスの議論

フィンケ（Finke, 1855–1938）は教会史家である⁽³⁵⁾。その著作の中で、本稿に関連するものは『ティラン殺害に関する教会会議の討議』⁽³⁶⁾である。そして、この会議の基本的な資料は1728年のジェルソンの著作⁽³⁷⁾である。私はショウエンシュテット（Schoenstedt）⁽³⁸⁾によりその資料から学ぶことが出来た。そこでフィンケとショウエンシュテット両者の研究を参考に暗殺事件と教会会議の展開を紹介するところから始めよう。

教会会議が開かれたのはヨーロッパ中にかかわる重大事件を契機としてであった。すなわち、1407年フランス王のオルレアン公ルイ（ドイツ語表記 Ludvig）が従兄にあたるブルゴーニュ公ジャン（ドイツ語表記 Johann）にパリで暗殺された。フランシスコ会修道士ジャン・プチ（Jean Petit）は、ブルゴーニュ公ジャンの暗殺行為を正当化する論文を発表した（1408）。その要点⁽³⁹⁾は、「臣下が王をその座から追い出すために王に対して陰謀をめぐらすなら、そうした裏切り者とティランを殺害することはすべての臣民に許されているだけでなく、大きな功績でもある」というところにあった。いうまでもなく「そのようなティランがオルレアン公である。」

(35) Heinrich Finke, Hrsg. von, Acta Concilii Constanciensis IV, 1928.

(36) Finke, a. a. O., 2. Abschnitt. Die Verhandlungen über den Tyrannenmord auf dem Konzil, S.237ff.

(37) Joannis Gersoni, Opera Omnia, Novo ordine digesta, & in V. Tomos distributa; Necnon Monumenta omnia ad Cansam Joannis Parvi pertinentia, Opera & studio M. Lud. Ellies du Pin, Tomus Quintus, Den Haag 2. Aufl.1728. ジェルソンの著作はインターネットで検索できる。

(38) Cf.: Schoenstedt.

(39) Finke, S.239.

さて、1413 年オルレアン派はパリで勢力を得て一時精神疾患を患った王に対する支配権を握ったときすでに死亡していたジャン・プチのティラン殺害論に真剣な攻撃を始めた。その中心人物がパリ大学長ジャン・ジェルソン (Jean Gerson) であった。教皇派とピカルディ地方人だけがブルゴーニュ公の側に付いていた。他方、王にそそのかされ、パリの司教で審問官の指導のもとで、1413 年 11 月から 1414 年 2 月までいわゆるパリ教会会議が行われた。プチに反対してジェルソンが呼びかけて主に神学者が集った。彼はプチを断罪する命題すなわちプチによるブルゴーニュ公殺害正当化の 9 項目としてジェルソンによってプチの文章から新に編集された宣言書とプチの文章による正当化とを断罪した。それに対して、ブルゴーニュ公は教皇ヨハン (Johann) 23 世に控訴した。教皇は 3 名の委員を任命したがその活動の詳細は分からない (人名は知られている)。しかしながら、コンスタンツ教会会議 (1414–1418) の最中である 1416 年 1 月 15 日控訴委員会は、パリ司教の判決を破棄したので、ジェルソン派の激しい抗議が起きた。

② ドゥールの書評

フィンケは、1893 年の『歴史学雑誌』におけるドゥール (Duhr, B.) の書評「ティラン殺害の許可に関する聖トマスの理論を正す」⁽⁴⁰⁾を紹介し、「篡奪者は極端な場合には聖トマスの見解にならって私人によって殺害されてよいのかどうかは、未だに争われている」と述べた。なお、ドゥールに対する討論者がシュレヒト (Schlecht) である。後者は前者に賛成している。たしかに、ドゥールは、「D. 某が、ティラン殺害の許可はイエズス会の発明品であるという非難に対して、それはコンスタンツ会議で支持されていることに注意を促し、さらに、聖トマスの『極端な場合における (in gewissen äussersten Fällen) ティラン殺害に関する』理論を見るだろう」と述べている。ドゥールは、トマスが「篡奪者」という極端な場合にはティラン殺害を認めているそうした著作の箇所をいくつも取り上げる⁽⁴¹⁾。そ

(40) Ibid.; B. Duhr, Berichtigung in Betreff der Lehre des hl. Thomas über die Erlaubtheit des Tyrannenmordes, in: Historisches Jahrbuch, 14, 1893 (Heft 1)(=Duhr), S.107ff.; P. Schlecht, Erwiderung auf die Berichtigung, id., S.109ff. 後者は結論としては前者に同意している。

(41) ショウエンシュテットは、本文で、ドゥールの挙げるトマスの箇所 (②③④) をティランの執行に関するもの (Schoenstedt, note 30 und 38, S.39 und 41) すなわち「執行における暴君」に当ると解しているがにわかには納得し難い。というのは、①がいうように②③では「任命」された支配者は前提されていないからである。また、彼はドゥー

して、「コンスタンツ教会会議の討議もまた同じことを示している」という。そして重要なことは、「極端な場合」と区別して、「この主張をする際に、当然、狭義のティラン殺害が問題になっているわけではない。言い換えるなら、私的な権威に基づいて『正当な』(legitim) 支配者の殺害が問題になっているわけではない」と述べていることである。つまり、正当な支配者である「狭義のティラン」を前提として私人による殺害が問題になるわけではない。それは「^{ティラヌス}暴君」の場合であってその殺害は許されていないのである（「^{ティラヌス}暴君」の概念は本稿第2部のバルトルスの分析の過程で「^{ティラヌス}僭主」と同様集中的に論じられるが、叙述のために便宜的に先取りして用いる）。この「^{ティラヌス}暴君」は篡奪者ではない。ドゥールは次のようにいっている。

「[私的な] 殺害はマリアナ (Mariana) ⁽⁴²⁾ も非難している。まさにイエズス会派の作家による沢山の引用も証明しているように、[殺害が許されていいと] はイエズス会派の同じ箇所でも言及されていない。」

したがって、私的な殺害は許されないのだが、それと区別してドゥールは「聖トマスによって論駁されている箇所」を紹介し、トマスのいう篡奪者のかかわる極端な場合に属する6カ所を掲げる。ただし、本稿で取り上げる①－④に続く⑤⑥は別な性質が現れているように思われるので簡単に資料的に言及するとともに内容の紹介と分析は省く。それでは、以下②③の前提をなす①と明確に極端な場合である「^{ティラヌス}僭主」にかかわる②③をまず紹介する。これらの事例はもはや「^{ティラヌス}暴君」に属するとは思えない。なお、略語は私には確実なものでないのでそのまま記載する。

① 神学大全 II.2. q.42. a.2 ⁽⁴³⁾

「第3に、ティラニクスな統治には正当性がない。公共善に即して任命されて

ルとシュレヒトが「ティランの二つのあり方の利用を怠っている」というが、*tyrannus ex parte exercitij* と *tyrannus ex defectu tituli* の用語は見えないから当てはまるが、ドゥールの場合前提されていると思われるのでそこまでいえるかどうか、その判断は慎重を期したい。

(42) Juan de Mariana (1536–1624) は、スペインの神学者、歴史家、イエズス会士で *De rege et regis institutione*, 1599 において「国民の主権と暴君殺戮を弁護した」（『岩波西洋人名辞典』1956年、1457頁）。ここでいう「暴君」は何を意味するか、後述するように、「暴君」か「僭主」かが問われる。

(43) *Ad tertium dicendum quod regimen tyrannicum non est iustum quia non ordinatur ad bonum commune Et ideo perturbatio huius regiminis non habet rationem seditionis.*, in: Duhr, S.108.

いないからである……。そして、それゆえに、この統治の混乱には謀反〔をいう〕理由がない。』

② 神学大全 II.2. q.69. a.4⁽⁴⁴⁾

「不正なものは別の方法で断罪される。そのような判決は、エゼキエル書第 22 章第 7 節⁽⁴⁵⁾ によるなら、強盗の (latronum) 暴力に対するに等しい。『〔イスラエルの〕 君たちは、オオカミが血を流そうとして獲物に襲いかかるように、そのただ中で〔同じことをしている〕。』そして、強盗に抵抗することができるように、悪の禍に抵抗することができる。(家の中に押し入る強盗の殺害は許される、トマスは出エジプト記第 22 章第 2 節を引きながらはっきりと q.64. a.7 に言及している。)」

③ 神学大全 II, sent. dist.44. q.2. a.2⁽⁴⁶⁾

「第 5 に、ある人の所有物を自らのために暴力によって奪うまた応じたくない臣民には強制的な合意によって奪う、さらに、侵略者に判決する上級者に訴えることが出来ない、そうした場合についてツルリウスは次のように述べている。すなわち、祖国の解放のために (ad liberationem patriae)、ティラヌスを殺害する者はほめたたえられ、特典を受ける。」

では、④を見よう。

④ 小作品 (opuscula) 39. 1. I c.6⁽⁴⁷⁾

(44) *Alio modo condemnatur aliquis iniuste; et tale iudicium simile est violentiae latronum secundum illud Ezech. 22, 7. "Principes eius in medio illius, quasi lupi rapientes praedam ad effundendum sanguinem". Et ideo sicut licet resistere latronibus ita licet, resistere in tali casu malis principibus.*, in: Dühr, Ibid.

(45) エゼキエル書第 22 章第 6 節「イスラエルの君侯たちは、お前の中でおのの力を振るい、血を流している。」

(46) ドゥールの引用する神学大全の文章は見つからないが、該当の文章をそのまま収録するものとして、*Summa Theologica, Supplementi Tertiae Partis Tomus Alter.1768, p. XII* がある。Ad quintum dicendum, quod Tullius loquitur in casu illo, quando aliquis dominium sibi per violentiam surripit, nolentibus subditis vel etiam ad consensum coactis, et quando non est recursus ad superiorem, per quem iudicium de invasore possit fieri; tunc enim qui ad liberationem patriae tyrannum occidit, landatur et praemium accipit.

(47) *Esset autem hoc multitudini periculosum et eius rectoribus si privata praesumptione aliquis attentaret praesidentium necem etiam tyrannorum Videtur autem magis contra tyrannorum saevitiam non privata praesumptione aliquorum, sed auctoritate publica procedendum. Primo quidem si ad ius*

「他方において、もしも私的な使命感によって（*privata praesumptione*⁽⁴⁸⁾）ある人が支配者の死を、さらにティラススの死を求める（*attentaret*）なら、こうしたことは、民衆にとってもその指導者にとっても危険であろう。……さらに、私的な使命感によってではなく、公的な権威によって（*auctoritate publica*）凶暴なティラススに対して先だって進むものを見ることはもっと重要である。第1に、少なくとも、民衆法によって王を選ぶことがその民衆自身にあるなら、王権をティラニケのように濫用している（*abutatur*）場合、不当にではなく、民衆によって立てられた王が殺害されうるし、その権力は抑制されうる。このような民衆は、ティラススを見捨てて（*destituens*）〔彼を〕不誠実に苦しめているとみなされるべきではない。自分自身に益があるからそうするのだが、もし民衆に以前からたえず服従しているなら、なおのことそのようにみなされるべきではない。……それゆえに、ドミニティアヌスは……ローマ元老院によって殺されたのである。」

紹介と分析はしないとすでに言及したので、次に⑤⑥を単純に資料として以下に掲げておこう。

⑤ q.64. a.7⁽⁴⁹⁾

「家に押し入る強盗の殺害をトマスははっきり許している。」

⑥ c.19⁽⁵⁰⁾

「ティラニスは臣下から信頼をもって頼りにされない。」

multitudinis alicuius pertinet sibi providere de rege, non iniuste ab eadem rex institutus potest destrui vel refrenari eius potestas si potestate regia tyrannice abutatur. Non putanda est talis multitudo infideliter agere tyrannum destituens, etiam si eidem antea perpetuo se subiecerat quia hoc ipse meruit…… Sic etiam Domitianus…… a senatu Romano interemptus est., in: Duhr, Ibid. なお、Thomas von Aquin, Über die Herrschaft der Fürsten, Reclam, 1971, S.24はabutaturをmißbraucht（濫用する）と訳している。そして、日本語訳では、トマス・アクィナス『君主の統治―謹んでキプロス王に捧げる』柴田平三郎訳、岩波書店、2009年、44頁参照。
(48) 前出の柴田訳は「私的な独断に基づいて」としている。ドイツ語訳は単にaufgrund einer persönlichen Erwägungとしている。ラテン語のpraesumptioは「傲慢、うぬぼれ、大胆」（田中『羅和辞典』）を意味するが、ティランを殺害しようとする心を指すから、「使命感」が文脈に即しているように思う。

(49) Duhr, ibid.

(50) Ibid.

③ トマスの資料の分析

こうしてみると、本稿で紹介する①は公共善にしたがって任命されていないから「僭主」にあたる。②と③は、「正当な支配者」に関するものとははっきり区別されている。その特徴としていえば、②では「強盗」の場合他人の家に押し入るその人を殺害できると同じように正当性を持たない「君主」すなわち「僭主」を殺害が出来る（「僭主」の概念はバルトルスの分析の過程で「暴君」と同様本稿第2部で詳論されるが、叙述のために便宜的に先取りして用いる）。つまり私人間の経験のアナロジーでもって暴力的な支配者の殺害が是認される。③では、「強制的な合意」によって祖国の所有物を略奪するものは「僭主」にあたるのでそのものを殺害できるといわれる。まさに侵略が当てはまると思う。

ところで、④では、「私的な使命感」によるものと「公的権威」によるものとが対比されている。そして、「私的な使命感」はなんらの正当性もない「独断」（柴田訳）と解されている。しかし、民衆は王を選ぶことができると同じくティラニクのように王権を用いるものを殺すことができるという場合、①のような条件がないから、そのティラニクは発端において正当であるといわれているのではないと思われる。そのために、「僭主」とはいいがたい。そうであれば、話しは「暴君」にとどまっているのではないか。なお、「暴君」の殺害は「公的な権威」つまりお墨付きがあれば許される。「僭主」ではそもそもお墨付きはないことが想起される。

それゆえに、フィンケは、紹介するドゥールの論文を使って、「暴君」と「僭主」の二つの区別を行っていると思う。そして、「強制的な合意」の無効がいわれるから、その際に侵略がこのカテゴリーにおいて位置付けられている。そこでさらに立ち入ると、彼もまた「トマスは篡奪によるティラヌス（*tyrannus usurpationis*）」と統治者のティラヌス（*tyrannus regiminis*）を区別していて、それゆえに、国法上意味のある正当な支配者（*legimen Regenten*）と篡奪者を区別している。前者の場合には、彼はあらゆる保護権を薦めていて、しかし、徹底してティラヌスの殺害は非難している」と述べる。

しかしながら、フィンケは、「暴君」と「僭主」の二つの区別の後者である「極端な場合の篡奪者は聖トマスの見解では私人によって殺害されてもいいかどうかは、なお研究上争われている」といってドゥールの主張を紹介しているからいささか歯切れがよくない。というのは、一見私人による殺害を留保し、その上で、彼は

公的權威による殺害を認めるからである。そうすると、公的權威とは何を意味するかが問われ、なぜ私人による殺害が留保されるかも問われる。いずれにしろ、私人による殺害が留保されるとしても、侵略する篡奪者に対する公的權威の抵抗は認められたのである。

(2) エルコレの研究から

バルトルスの「暴君」^{ティラスス}と「僭主」^{ティラスス}という二つの考え方の背景にはアウグスチヌス (Augustinus)、教皇レオ (Leo)、トマス・アクィナスの考え方があるという見解は、すでに1914年にエルコレ (Ercole)⁽⁵¹⁾によって詳細に論じられている。彼は、バルトルスと同時代人のサルタティ (Salutati) がティランの二つの概念を発表していたと主張する著書をドイツ語で発表した。ここではサルタティは扱わないが二つの概念にかかわるところを若干紹介しておきたい。

すなわち、エルコレによれば、古来から一連の流れがあつてそれは直接間接にバルトルスの *ex defectu tituli* のティラススの概念に影響を与えた。例えば、アウグスチヌスは「結婚の善」という道徳的な論文の中で次のようにいった。

「ある人が、不正・不当に侵入した土地の果実によって大きな施物をなさそうとして、その土地を利用するとしても、そのことのゆえに、強奪を正当化はしない。他人の田舎の父祖の財産や正当な (*legitimus*) 蓄財に貪欲漢が襲いかかっても、そのことのゆえに、正当な所有者を作った市民法規定は非難されるべきではない。ティラニクスな一味の邪悪な行為 (*perversitas*) は、ティラススが王の慈悲深かさによって臣民を取扱ったとしても、称賛に値しない。王がティラニクスのような残酷さによって荒れ狂ったとしても、王権の優位的な秩序 (*ordo*) は非難に値しない。すなわち、不当な権力を正しく用いようとすることと正しい権力を不当に用いることとは別物である。」⁽⁵²⁾

(51) Francesco Ercole, *Tractatus de Tyranno* von Coluccio Salutati, Kritische Ausgabe mit einer historisch-juristischen Einleitung. Ein Beitrag zur Geschichte der Publizistik und des Verfassungsrechtes der italienischen Renaissance, 1914, S.91, 95ff. und 97.

(52) Augustinus, *De bono conjugali*, in: *Patrologiae Cursus Completus, Patrologiae Tomus XL*, 1845, p. 384–385 (PDF198–199): *Neque enim si agris inique ac perperam invasus ita quisque utatur, ut ex eorum fructibus largas eleemosynas faciat, ideo rapinam iustificat: neque si alius ruri paterno vel juste quaesito avarus incumbat, ideo culpanda est juris civilis regula, qua possessor legitimus factus est.*

この文章によれば、アウグスチヌスは、「正当な」王権の優位する秩序のもとで起きるティランの権力と邪悪・不当な権力とを区別しているから、たしかに、バルトルスのような「^{ティラヌス}暴君」と「^{ティラヌス}僭主」という二つの区別のような思想が現れている。それだから、バルトルスの先駆としてアウグスチヌスが理解されないわけではない。しかしエルコレの関心は、その先駆の中身の検討よりも、「権力の発端の違法性が権力の適法な行使そのものによって」⁽⁵³⁾ 正当化されないかどうかにある。アウグスチヌスが不当な権力を正しく用いることと正当な権力を不当に用いることとは「別物」(*aliud*) といったところには、「疑いなく概念のまったく法学的な意義が強調されている」とか、「バルトルスの区別を予感させる区別が疑いなく対置されている」⁽⁵⁴⁾ とかいわれている。まさに、エルコレは、「アウグスチヌスの思想からすれば、篡奪の支配のもっとも実적인結末は、[発端の] 権力の真の適法性の喪失よりもその邪悪な行為 (*perversitas*) そのものであり、そのような権力はティランよりも称賛に値しない (*non laudabilis*)」⁽⁵⁵⁾ と指摘する。つまり、アウグスチヌスは、篡奪があればそれだけでよくないというのであって、どのような実的な効果をもたらしたかという行使のあり方を考えていないとエルコレは批判を展開しているのである。つまりよい効果もたらされているかもしれないことを考慮していないというのである。もしそうであれば、彼は、アウグスチヌスの中にバルトルスの二つの「^{ティラヌス}暴君」と「^{ティラヌス}僭主」の先駆があるかどうかを検討するというよりも、彼の関心からアウグスチヌスを読み込むところに話しは移っているのではないと思われる。エルコレの関心は、権力の獲得の仕方とその権力の行使の仕方の区別にあり、バルトルスは二つの区別によってアリストテレスの「利益の」獲得に関するティランの伝統的概念を利用していながらその行使に関するティランの問題を「無視」していると主張するところにある。

また、トマス・アクィナスが検討されているが、これはショウエンシュテットの

Nec tyrannicae factionis perversitas laudabilis erit, si regia clementia tyrannus subditos tractet; nec vituperabilis ordo regiae potestatis, si rex crudelitate tyrannica saeviat. Aliud est namque injuste potestate juste velle uti, et aliud est justa potestate injuste uti. アウグスチヌス「結婚の善」: 所収『アウグスティヌス著作集 7、マニ教駁論集』岡野昌雄訳、教文館、1979 年、254 頁参照。

(53) Ercole, S.88.

(54) Ibid.

(55) Ibid., S.89.

ところで触れたいのでここでは省く。

いずれにしろ、本稿は、フィンケがバルトルスの「^{ティラヌス}暴君」と「^{ティラヌス}僭主」の二つの考え方に対応させてトマスを引用したと考えると同じく、アウグスチヌスの文章をもそのように読んだであろうと推測する。

(3) ショウエンシュテットの研究から

ショウエンシュテットは前述の教会会議における議員個人の意見を検討した。要約すると、その内容は次のようである。

ある議員はこういった。すなわち、教会会議の中で、ティラン殺害の法的根拠の問題が主に論じられたわけではない。神の隠された命令による（*ex praecepto occulto divino*）殺害と、神の方を見ることなしに国家の権威だけによる（*ohne den aspectus ad Deum nur autoritate rei publicae*）殺害、自己の権威による（*autoritate propria*）殺害、これらの間で、人々は根本的な区別を取り入れようとした⁽⁵⁶⁾。最後は除外されるが、第1の場合は明らかに可能と見られた。第2の場合はまったく承認されていた。つまり篡奪者は国家の構成員の誰でも（*jedes membrum des Staates*）殺害できる。「殺害の嫌悪はそれゆえに直接神によって除去されうだけでなく、国家の福祉と見えざる一致によっても取り除かれうる。別の議員はもっと単純化して二分した。すなわち「判決による」ものと「靈感による」ものである。

こうした思想の流れにジェルソン派は抵抗する⁽⁵⁷⁾。

ところで、ジェルソン派もブルゴーニュ派も、とくに後者は巻き返しを企ててここにコンスタンツ教会会議が開かれた。そして、最終的な一致はなく、1415年7月6日にティランはすべて誰によっても殺害されうという命題は否認されたが、ブルゴーニュ派は新たな鑑定を求めた。その結果、87票の内61票がその命題に反対を示した。1416年1月15日に控訴委員会はパリ信仰会議の判決を取り消した⁽⁵⁸⁾。「もはや最終的な一致は成立しなかった。両派は己が成果を記録できた。しかしながら、1415/16年の冬の投票結果は、プチ派の数が完全に圧倒していたことを証明した。」⁽⁵⁹⁾

(56) Schoenstedt, S.95.

(57) Ibid.

(58) Ibid., S.97.

(59) Ibid. 会議の基本的な資料集は Jean Gerson, Opera. 5 Bände (Amsterdam 1706; Den

ショウエンシュテットは、こうした教会会議の議論の解説を通して、フランスでは「ティラヌスは王の敵である、皇帝の敵である」という理解が強まった、この議論を通して「伝統的な二つのティラヌス」の概念がよみがえったという。パリでは、王のティラヌスと並んで古い概念が復活し、コンスタンツ会議では「古い概念のルネサンス」が見られたという。言い換えるなら、彼は「統治におけるティラヌス」(tyrannus regimine)と「敵としてのティラヌスすなわち篡奪者」(tyrannus hostilis = Usurpator)の区別をいう。この篡奪者は反逆者その者であるという⁽⁶⁰⁾。

会議のたいていの意見ではプチの命題は優勢になっていて、「ティラヌスの殺害は許されているだけでなく、まさに義務と見られた。すべての臣民が、司祭すらも、王の敵を殺害することが出来る。プチの命題は真実であった！大逆罪(crimen laesae maiestatis)を犯すティラヌスはすべての人によって排除されてよい—身分の高いものによっても低いものによっても。もっとも崇高な忠誠義務よりもティラヌスに対する忠誠関係を優先する支配者に反対してもそれは罪ではない。」⁽⁶¹⁾

かかるショウエンシュテットのティラヌス殺害に関する教会会議の資料の分析とフランスにおける大逆罪の視点のかかわりは、たしかに高く評価されている。それゆえに、ショウエンシュテットがトマスの意見として、「〔支配の〕優越性の用い方に関する」ティラヌス(tyranni quantum ad usum praelationis)と「〔支配の〕優越性を獲得する方法に関する」ティラヌス(tyranni quantum ad modum acquirendi praelationis)との二つの概念を指摘する⁽⁶²⁾とき、それはショウエンシュテットの「統治におけるティラヌス」(tyrannus regimine)と「敵としてのティラヌスすなわち篡奪者」(tyrannus hostilis = Usurpator)に対応するものであったと思う。そして、トマスにおける対比は、バルトルスの「すでになじみの

Haag 1728)である。ショウエンシュテットの引用をインターネットで確認できる。なお、簡潔に会議の様子を知るためには Daniel Gaschick / Christian Würtz, *Das Konstanzer Konzil, eine kleine Geschichte*, 3. Auflage 2014, S.89–91 が便宜に思える。そして同会議はその他教会の一致、教会改革の問題をも扱っていた。

(60) Schoenstedt, S.100.

(61) Ibid., S.101.

(62) たしかに Theologische Realenzyklopädie, Band 35, 2003(=TRE), S.745 も Sent. II dist.44 qu.2 art.2にある用語を紹介する

ある」*tyrannus ex parte exercitii* と *tyrannus ex defectu tituli* に等しいものであっただけでなく、ショウエンシュテットは、「根絶し難い軍事独裁の傾向をもったルネサンス共和国の持つ、そして、政治的現実を特によく映し出すティラヌスの概念」こそ篡奪者であって、それが「新しい」と指摘する⁽⁶³⁾。

しかしながら、これまでバルトルスを見たところでは、^{ティラヌス}「暴君」と^{ティラヌス}「僭主」という二つの概念の間に序列関係はなかったと思う。それゆえに、篡奪者の概念が新しいとどうして言えるかは問われる。^{ティラヌス}「暴君」と^{ティラヌス}「僭主」という二つの概念のどちらも政治的現実をあらわにする法概念であったのではないかと思うからである。それゆえに、ショウエンシュテットの論述はある片寄りを示しているのではないかと考える。その片寄りの分だけ篡奪者には、ドゥールやフィンケよりも厳しくなる。つまり公的権威による殺害という制限や抑制はなくだれでもが殺害できるようになったからである。

ショウエンシュテットはライプチヒ大学哲学部に 1936 年に博士論文を提出している。そして、本報告で取上げた著書が 1938 年に出版されている。ところで、ナチスが 1933 年に政権をとり、チェコスロヴァキアを併合したのは 1939 年であったから、ヨーロッパはすでに荒れすさんでいたと思う。ショウエンシュテットがどのようにナチスを見ていたかは分からないが、「真の支配者の逆像がティラン」である⁽⁶⁴⁾といっていることに何かメッセージが込められているかもしれない。彼が師事した Hermann Heimpel は戦後歴史学会において指導的働きをし、ゲッチンゲン大学におけるマックス・プランク歴史研究所の創設にかかわりディレクターを務めた。またナチス時代におけるそのあり方は歴史学会で検討されたそうである（ウィキペディア、インターネット参照）。

(63) Ibid., S.51.

(64) Schoenstedt, S. IX.

第2部 近世におけるバルトルスの受け入れ方：基礎研究

1. バルトルス「ティラニア論稿」とは何か

(1) ティラン概念の二つの区別

すでに概観したところの知識をもつというなら、カントの *Tyrann* (*non titulo sed exercitio talis*) という表現を分解すると、それは *non titulo* と *exercito* の二つに分けられる。こうした用語と使い方はたしかにバルトルス (*Bartolus de Sassoferrato*, 1313/ 1314–1357) に由来する。バルトルスにならってカントに対応させるなら、それは後代には *tyrannus ex defectu tituli* と *tyrannus ex parte exercitii* になり、*tyrannus sine titulo* が *tyrannus absque titulo*、*tyrannus exercitio* が *tyrannus quoad exercitium* という場合もある。こうした表現の言い換えはあるが欧米ではそれぞれ意味としては同じと理解されている。

そうすると、欧米の場合 *tyrannus* という同じ言葉がそれを形容する語句で意味上区別される。例えば、カントが *non titulo* と *exercito* を使い分けたようにである。そうであるなら、どちらも、日本語では「僭主」で、また「暴君」で表されてよいかどうかは問われる。実際、論者がそのように訳す理由は明確とはいいがたい。そして、これまで何度も「^{ティラヌス}僭主」と「^{ティラヌス}暴君」の用語に出会ってきた。問題はなぜそのように訳すかにある。それを根本から考えるのがこの第2部である。その資料はこれから見るバルトルスの著作である。第1部ではここまで深くは検討していない。

さて、バルトルスのティラニアに関する重要な先行研究はウールフ (*Woolf*)⁽⁶⁵⁾ とエマートン (*Emerton*)⁽⁶⁶⁾ のものであるが、それらに学びながらバルトルスのティラニアに関して検討してみよう。なおウールフは *De Tyrannia* の要点を解説している⁽⁶⁷⁾。エマートンは *De Tyrannia* の重点的な英訳と解説をしている⁽⁶⁸⁾。本稿はバルトルスのテキストである資料から考えたい。

(65) Cecil N. Sidney Woolf, *Bartolus of Sassoferrato, His position in the history of medieval political thought*, 1913 (=Woolf). 今日再版されているし、インターネットでも閲覧できる。

(66) Ephraim Emerton, *Humanism and tyranny*, 1925 (=Emerton).

(67) Woolf, p.162–171.

(68) Emerton, p.126–154. Ibid., p.123 note 1 は 1588 年版㉓と 1602 年版㉔を掲記する。

(2) 「ティラニア論稿」の構成の概観

バルトルスは著名なローマ法学者であった⁽⁶⁹⁾。そのティラニアに関する文献は *Bartoli a Saxoferrato, Consilia, Quaestiones, et Tractatus* の中に収録された一つである *de Tyrannia*⁽⁷⁰⁾（死後出版）である。その著作は、日本語としては「ティラニア論稿」と呼ぶ。本稿の作成のために、「ティラニア論稿」におけるどこを必要として選んでいるかを自覚するべきだからその構成を概観しておかなければならない。

ところで、「ティラニア論稿」の出版はヨーロッパ各地で行われ、今日その文献は欧米においてデジタル化されインターネットで閲覧複写が可能である。しかし、そうはいつてもそれは古い時代の文献だから、保存状態やデジタル化の仕方などによって現実にはさまざまな問題を抱えている。ものによってはほとんど文字が潰れていて判読が不可能だとか、散逸した頁を抱えたデジタル化だとか、そのためにその存在を確認できて判読ができるものを利用することが重要になる。デジタル版を参考までに以下に掲記する。

- ① 1485 Venedig, PDF 198–202
- ② 1487 Venedig, PDF 200–204
- ③ [ca.1495] [Lyon], PDF 221–225
- ④ 1495 Venedig, PDF 188–192
- ⑤ 1498 Paris, PDF 223–227

(69) Bartolus de Saxoferrato, in: Gerd Kleinheyer und Jan Schröder (Hrsg.), *Deutsche und Europäische Juristen aus neun Jahrhunderten*, 4. Auflage, Uni-Taschenbücher 578. C. F. Müller, 1996, S.46 では、バルトルスの全体像は別として、ティランに関してはわずかに彼は「支配権力の正当性の問題を詳細に論じた」といわれている。

(70) *tyrannia* は中世ラテン語であって、意味は「邪悪、不正（直）」(*improbitas*) ; 「(品性の) 悪質、ふしだら、軽率」(*nequitas*) ; 「不条理、突飛なこと、意固地、ひねくれ」(*perversitas*) といわれる (Charles du Cange, *Glossarium, Mediae et Infimae Latinitatis*, Tomus VIII, p.220)。また「暴政、虐政、圧制、暴虐」(*tyranny*) といわれる (Alexander Souter, *Compiled by, A glossary of later Latin to 600 A. D.*, 1996, p.434)。そのような意味から *tyrannia* = *Tyrann*, *tyranny* といわれる。なお、*tyannia* は中世ラテン語であるという理解を示すものとして、*Merriam-Webster's Collegiate Dict.*, Tenth Ed., 1998, p.1279 と『新英和大辞典』第5版、研究社、1980年、2287頁がある。ところが、ギリシャ語 *tyrannia* (τυραννία) と示すものもある (Albert Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens* par Henri Chirat, 1954, p.834)。

- ⑥ 1523 PDF 188–192
- ⑦ 1537 Lugdunum, PDF 339–346
- ⑧ 1552 Lugduni, PDF 248–253
- ⑨ 1577 Taurin., PDF 287–291
- ⑩ 1581/1575 Venetiis, PDF 233–238
- ⑪ 1585 Venetiae, 237–242
- ⑫ 1588 Basileae, PDF 237–242
- ⑬ 1589 Augustae, PDF 290–295
- ⑭ 1590 Venetiis, PDF 237–242
- ⑮ 1596 Venetiis, PDF 241–246
- ⑯ 1602 Venetiis, PDF 251–256

この一覧表を利用すると、判読の問題は別として、いくつかの特徴を指摘できる。すなわち、「ティラニア論稿」は、⑥–⑯までは見出しの部分と本文の部分との二つで構成されている。これに基づいていえば、見出しのあるもの（⑥–⑯）とそうでないもの（①–⑤）、本文全体を 45 に小分けしているもの（⑥–⑯）とそうでないもの（①–⑤）とがある。なお、見出し⑥–⑯の内容はすべて同じである。こうしてみると、「ティラニア論稿」は後世の編輯上の都合で⑤と⑥との間で大きな変化を受けている。

ところで、45 に小分けしていない①–⑤は、本文全体を 12 のブロックに大分けしている。その中身は特段小分けされていない。ところが、⑥–⑯になると、大分けの中身は通番号で 1 – 45 の小分けから構成され、見出しも通番号 1 – 45 で示される。そのために、見出しの 1 – 45 と小分けの 1 – 45 とは対応する関係にある。

そこで、見出しは「見出し 1」のように表わし、12 の大分けを「章」、45 の小分けを「節」とし、ラテン語の原文で「節」にあたるところを「§」で表すことにする。なお、章に当たるところはラテン語の序数で示される。primo、secundo、tertio..... のごとしである。大分けと小分けとは次のように整理できる。すなわち、第 1 章第 1 節 (primo §1)、第 2 章第 2–7 節 (secundo §2–7)、第 3 章第 8–10 節 (tertio §8–10)、第 4 章第 11 節 (quarto §11)、第 5 章第 12 節 (quinto §12)、第 6 章第 13–15 節 (sexto §13–15)、第 7 章第 16–26 節 (septimo §16–26)、第 8 章第 27–30 節 (octavo §27–30)、第 9 章第 31–33 節 (nono §31–33)、第 10 章第

34 節 (decimo §34)、第 11 章第 35–37 節 (undecimo §35–37)、第 12 章第 38–45 節 (duodecimo §38–45) である。

そして、エマートンはこのような大分けと小分けの有機的結合の方法を採用し、大分けごとに「chapter」をもって表示しその chapter ごとに中身である小分けの節を「§」をもって表示している。しかし、彼の利用した版が⁴¹と¹⁶であるから、⁵と⁶との間で生じた編集上の変化を受けた後代のものであることはいうまでもない。

なお、一覧表の最初の 4 桁の数字は印刷年である。印刷年の後の文字は文献の生産地を表す。PDF の後の数字はその複写範囲を示す。また、⁶–¹⁶には注釈があるがそれにはここでは言及しない。

そして、出版年というなら、デジタル版には 1505 版というものもあるが、その文献のタイトルや出版年を示すカバーがないので掲記していない。次に、バルトルスの著作の再版は宗教改革の前からその最中にかけて行われている。そのために再版への関心が必ずしも宗教改革の動きに沿ったものではないのではないかという興味深い疑問が現れる。その疑問が何を意味するかは今後の研究課題であろう。なお、17 世紀に入っても再生産されているが私のアルトジウス研究への関心から¹⁶で区切りをつけた。いずれにしろ、同文献がヨーロッパで広く読まれ後世に大きな影響を与えたことはたしかである。

なお、本稿作成のために私は、判読しやすと思われた¹² 1588 Basileae, PDF 237–242 を利用する。というのは、その他は、外観としては表面上理解できても、多くの場合中身が判読しやすくないからである。

(3) 「ティラニア論稿」の主要箇所：資料として

本稿にかかわるバルトルスの「ティラニア論稿」の主要な箇所を資料として紹介しよう。資料の紹介という意味から、該当の翻訳を以下掲記し、原文そのものは注で掲記する。なお、翻訳は容易でないので時に原文のラテン語を訳語の後に参考までに付け加える。

見出し 1 ティラヌスはギリシャ語 **Tyros** に由来し、それはラテン語では強いあるいは狭量な (**fortis sive angustia**) といわれる⁽⁷¹⁾。

第 1 章第 1 節 私は、ラテン語で強いあるいは狭量を意味するギリシャ語 **Tyros**

(71) “1 Tyrannus a Tyros Graece, quod Latine dicitur fortis sive angustia.”, in: Bartolus, Tracitatus de tyrannia, p.321.

に由来するティラヌスを検討し、そこから強い君主はティラヌスと呼ばれる、そういうことを研究しよう。その後で以下のことが付け加えられる。すなわち、ティラヌスは、極悪の、非道な君主、支配が贅沢で残酷な君主、人々に対し最も残忍な支配を行う君主と呼ばれる。彼らは狭量な **Tyros** のゆえに〔人々を〕苦しめる (*angustiant*)、奴隷を拷問する。フゴ (**Hugo**) によれば、言われているように **Tyrus** [**Tyros**] が説き明かすところは、聖書の解釈からは明らかである。そこでは、**Tyrus** [**Tyros**] は苦難、救い、勇気を説き明かしている、これらは、ティラヌスの状況や称賛に値する (*probandus*) あり方が問われる場合には有益 (*utilis*) であると述べられる⁽⁷²⁾。

見出し 2 ティラヌスは、国家 (**communi Reipublice**) を法によらずに (**non iure**) 支配する⁽⁷³⁾。

第 2 章第 2 節 どのようにティラヌスは定義されるかを研究しよう。私は次のように答える。〔教皇〕グレゴリー [1 世] は、モラリア (**Moralium**) 11 章において、次のように定義している。すなわち、“本来ティラヌス” (*proprie Tyrannus*) は、国家を法によらないで支配する (*communi Reipublicae, non iure principatur*) といわれる。しかし、あらゆる高慢なもの (*omnis superbus*) が固有なやり方で (*iuxta modum proprium*) ティラニス (*tyrannis*) 〔暴虐〕を行うことであると理解されるべきである。時々あるものはもともと尊敬されるべき託された権力を口実として国家 (**Respublica**) に対して、またあるものは地方 (*provincia*) に対して、またあるものは都市 (*civitas*) に対して、またあるものは自己の家 (*domus*) に対して、ろくでもないものを隠して (*per latentem nequitiam*) こういうことを行う。自分の認識を根拠とするために神に眼を向けることはない。どんなに大きな悪であれそれをなしうる、しかしながら強力な権

(72) “§1 Primo quaero unde dicatur Tyrannus ? & dicitur a Tyros Graece, Latine fortis sive angustia, unde fortes Reges Tyranni vocabantur. Postea accidit, Tyrannos vocari pessimos & improbos Reges, & luxuriose dominationis crudelitatem, & crudelissimam dominationem in populis exercentes, a Tyros quod est angustia: quia angustiant, & cruciant servos suos: secundum Hugo, quod Tyrus interpretetur, ut dictum est, paret ex interpretationibus Bibliae, ubi sic habetur: Tyrus interpretatur vel tribulatio, sive saluatio, aut fortitudo: & haec utilia sunt, cum quaeritur de conditione Tyranni, & de modo probandi.”, in: Ibid., p.321–322.

(73) “2 Tyrannus est, qui communi Reipub. non iure principatur.”, in: Ibid., p.321.

力を持たない、そういうものは自己の内側では（*apud se*）ティラヌスである。その人の心の内では（*intus*）不条理が支配している。それというのは、もしも隣人（*proximus*）をいっそう外面的にひどく苦しめるなら、しかし、苦しめてやろうと心の中では（*intrinsecus*）権力を持ちたいと十分努力するものだからである⁽⁷⁴⁾。

見出し3 グレゴリーの言葉は法として順守されるべきである⁽⁷⁵⁾。

第2章第3節 法として順守されるべきものはグレゴリーの文字による言葉である。カノン・サンクタ・ロマナ〔ローマ教会法〕第15節（15. *distinct. cano. sancta Romana.*）の言葉、すなわち、本来ティラヌス（*proprie tyrannus*）を若干考えてみたい。王（*Rex*）あるいはローマ皇帝は、正しく、真実で、普遍的であるけれども、しかし、もしあるものがその地位を不当に獲得しようとするなら、そのものは本来ティラヌスと呼ばれる。⁽⁷⁶⁾ ……⁽⁷⁷⁾ そのものは法によらずに支配している、そういうことが起きている。というのは称号が欠けているからであり、法によって選ばれているわけではないからである、ところがしかし排斥されている。また、選挙はないが長は尊敬されるべきである、選挙されていないものが位についている、ところがしかし後に裁かれて排斥されてい

(74) “§2 Secundo quaero, qualiter dissiniatur Tyrannus ? Respond. Gregor. lib.11. Moralium, sic diffinit: Proprie Tyrannus is dicitur, qui communi Reipublicae, non iure principatur. Sed sciendum est, quod omnis superbus iuxta modum proprium tyrannidem exercet, nonnunquam alius in Republ. hic per acceptam dignitatis potentiam: alius in provincia, alius in civitate, alius domo propria, alius per latentem nequitiam hoc exercet, & cogitatione sua non intuetur Deum: qui quantum mali valeat facere, & tamen deest potestas fortis, apud se Tyrannus est, cui iniquitas dominatur intus: quia si exterius affligit proximos, intrinsecus tamen habere potestatem sufficit apperere, ut affligat.”, in: *Ibid.*, p.322.

(75) “3 Verba Gregorij pro lege servanda sunt.”, in: *Ibid.*, p.321.

(76) “§3 Haec sunt verba Gregor. ad literam, quae pro lege servanda sunt: 15. *distinct. cano. sancta Romana.* quae verba aliquantulum discutiamus, proprie Tyrannus, &c. sicut enim Rex, seu Imperator Romanorum est iustus, & verus, & universalis: ita si quis illum locum vult iniuste obtinere, appellatur proprie Tyrannus”, in: *Ibid.*, p.322.

(77) 省略した箇所の略語を読み解けない。またエマートンはこの省略箇所には言及していない。省略箇所は次のようである。“de tali Tyranno habemus C. de sacrosanct. eccles. l. decernimus. & l. omni novatione. & ibi not. communi Reipubli. & c. de republic. intelligitur: ut l. eum qui vectigal. ff. de verbor. significatio.”, in: *Ibid.*, p.322.

る、そのごとしである。それは、裁きの話しは別として使徒座 6 章の長 (cap. ad Apostolicae. lib.6.) や、サウル王は別として預言者サムエルが語った列王記上第 13 章の長のごとしである。「お前は愚かなことにあこがれた。お前に示した主なる神の命令を忠実に (culto) 語らなかった。もしもしなかったなら、直ちに今主はお前から国を取り上げる、決してお前の国は立ち上がらないであろう。」それゆえに、罪のために王が国を奪われるということが出現し、その時からそのものはティラヌスである。法によらずに支配するからである。しかし、すでに、私は一般的なティラヌスについて語った。以下では、本来ティラヌスではない特殊的なティラヌスについて語る。あらゆる高慢なものがそうである⁽⁷⁸⁾。

見出し 4 高慢はあらゆる悪の根源⁽⁷⁹⁾。

第 2 章第 4 節 高慢はあらゆる悪の根源である。それは特にティラヌスに現われる。その結果 5 種類のティラヌスが生じる⁽⁸⁰⁾。

見出し 5 地方のティラヌス、都市のティラヌス、家のティラヌス、自己自身のティラヌス⁽⁸¹⁾

第 2 章第 5 節 それらをその場所ごとに述べる。すなわち、ローマ国家における一般的なティラヌス (Tyrannus generalis)、地方において法によらずに支配する地方のティラヌス (Tyrannus provincialis)、都市のティラヌス (Tyrannus civitatis)、一つの家々のティラヌス (Tyrannus unius domus)、自己自身のティラヌス (Tyrannus suiipsius) である⁽⁸²⁾。

(78) “[§3] Non iure principatur, & c. hoc contingit: quia caret titulo: quia est electus non de iure, & reprobatus: ut ext. de electio. cap. venerabilem. vel non electus coronatus, & postea reprobatus in iudicio: ut ext. de re iudic. cap. ad Apostolicae. lib.6. & de Saul Rege, 1. Regum13. cap. ubi Samuel propheta sic ait: Stulte egisti, nec culto disti mandata Domini Dei tui, quae tibi praecepit, quod si non fecisses, iam nunc praeparasset Dominus tuum regnum: sed nequaquam regnum tuum consurget, & c. Apparet ergo, quod propter peccata rex privatur regno, & extunc est Tyrannus: quia non iure principatur. Sed superius dixi de Tyranno universali: hic de particulari, qui non ita proprie Tyrannus est. Omnis superbus, & c.” in: Ibid., p.322.

(79) “4 Superbia radix omnium malorum.” in: Ibid., p.321.

(80) “§4 Superbia est radix omnium malorum, quae praecipue in Tyrannis apparet. Et sequuntur quinque species Tyrannorum,” in: Ibid., p.322.

(81) “5 Tyrannus alius provincialis, alius civitatis, alius domus, alius suiipsius.” in: Ibid., p.321.

(82) “§5 quas prosequitur eo loco nam alius est Tyrannus generalis in communi Repub.

見出し6 ティラニアを獲得しようとするか管理しようとするものは、成就していないとしても、罰せられる。⁽⁸³⁾

第2章第6節 永遠の審判者（*aeternus iudex*）の裁きは……神学者のすることのために（*Theologis*）あきらめるが、しかし、私は、権力を持っている（*habere potestatem*）と語る（*expedio*）のを聞くことがある（*excipio*）。彼は、ひどく苦しめるために「権力を」欲しがっている（*Appetit ut affligat.*）⁽⁸⁴⁾。

見出し7 ティラヌスの現実とは、とりわけ、人々〔国民〕をひどく苦しめる（*affligo*）ことにある⁽⁸⁵⁾。

第2章第7節 ティラヌスの現実（*Tyrannicus actus*）は、とりわけ、人々〔国民〕をひどく苦しめることにあるために、彼らを欠乏〔飢え〕で苦しめ拷問する（*angustiat & cruciat*）ものはティラヌスと判定される。こういうことは何よりも注目されるべきである。」⁽⁸⁶⁾

見出し12 都市のティラヌスは、都市において法によらずに支配するものである。都市のティラヌスは何種類もある。⁽⁸⁷⁾

第5章第12節 都市のティラヌスにはどの位の種類（*species*）があるかを研究しよう。都市のティラヌスが、都市において法によらないで支配することであるのは、上述のところから明らかである。さらに、しかし、法によらないたくさんの 방법으로首長が生じる。それゆえに、ティラヌスの種類はたくさんある。すなわち、いわばあるティラヌスははっきりと眼に見え、あるものはおおわれて隠されている。さらにまた（*item*）数々のティラヌスが存在し、それはいつか明らかに起こる。すなわち、執行者としての（*ex parte exercitij*）ティラヌス

Romanorum: alius provincialis, qui in provincia non iure principatur: alius civitatis: alius unius domus: alius suiipsius.”, in: Ibid., p.322.

(83) “6 Tentans vel procurans Tyranniam punitur, licet non perfecerit.”, et “7 Tyrannicus actus specialiter consistit in affligendo subditos.”, in: Ibid., p.321.

(84) “§6 examinatione aeterni iudicis: ideo dimitto Theologis Illud tamen excipio, quod vobis expedit habere potestatem. Appetit ut affligat.”, in: Ibid., p.322.

(85) “7 Tyrannicus actus specialiter consistit in affligendo subditos.”, in: Ibid., p.321.

(86) “§7 Notandum est singulariter, quod actus Tyrannicus specialiter consistit in affligendo subditos, dicitur enim Tyrannus, qui angustiat & cruciat suos.”, in: Ibid., p.322.

(87) “12 Tyrannus civitatis est, qui in civitate non iure principatur. Tyrannus civitatis quotuplex sit.”, in: Ibid., p.321.

と称号の欠如している (*ex defectu tituli*) ティラヌスである。また同様に、称号あるいは称号の欠如にかんして隠されたティラヌスをいつかどこでも (*de quolibet*) 体験するに違いない。⁽⁸⁸⁾

(4) 「ティラニア論稿」に基づくコメント

以上のバルトルス「ティラニア論稿」に基づいていくつかのことを述べてみよう。

① ギリシャ語に由来するティラヌス

第 1 章第 1 節によれば、ティラヌスというラテン語はギリシャ語に由来し、ラテン語によって解釈ができるといわれる。すなわち、「強い」「狭量である」君主が述べられる。そういう君主は、極悪、非道、贅沢、残酷、残忍で特徴づけられる支配をする。また人々を「苦しめる」「拷問する」。

それでは、そういう君主に出会ったとき人々はどうすべきか。バルトルスはそういうティラヌスに抵抗すべきである、殺害すべきであるとはいわない。むしろ聖書(本文の第 1 章第 1 節)に基づくあり方をいう⁽⁸⁹⁾。

バルトルスの聖書解釈は、本文の第 1 章第 1 節において「聖書の解釈からは明らかである」といわれているだけで、聖書のテキストに即していわれているわけではないからごく基本的な聖書理解に立つものであると思われる。そのためにその解釈は、必ずしも明確ではないが、そして、現代人には理解しがたいであろうが、ティラヌスに出会ったときは「有益」(*utilis*) だといわれる(第 1 章第 1 節)。このこと

(88) “§12 Quinto quaero, de Tyranno civitatis, quotuplex hi eius species? Respond. ex praedictis constat, quod Tyrannus civitatis est, qui in civitate non iure principatur. sicut autem non iure principatus multis modis contingit, ita multae sunt Tyrannorum species. Nam quidam est Tyrannus manifestus, quidam velatus, & tacitus. Item esse quem Tyrannum manifeste contingit, quandoque ex parte executij, quandoque ex defectu tituli. Item eodem modo Tyrannus velatus est, quandoque propter titulum, quandoque propter defectum tituli, de quolibet ergo videamus.”, in: *Ibid.*, p.323.

(89) まさに、バルトルスのいう聖書の解釈とは、次のような説明と一致するかもしれない。すなわち、「己が生を神にささげる信仰は、迫害や患難のただ中において、忍耐を生み出し(Ⅱテサロニケ 2:4、ロマ 12:12)、この忍耐において、キリスト者は『見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ』(Ⅱコリント 4:18) こと、人を困憊苦悩せしめる苦難を、軽きつかの間のものとして受け取ること、来るべき栄光に対する確固たる希望をもつことなどができるようになるからである」(中川秀恭「くるしむ」『旧新約聖書神学辞典』監修小塩力・山谷省吾、新教出版社、1961 年 163 頁)。中川は、苦難を内面化させ忍耐を強調する。

からその解釈ははっきりしてくる。というのは、ティラヌスの支配は、たぶん（キリストの十字架における）苦難、救い、勇気が現れる契機であるといわれるはずだからである。これは、苦しみも神の恵みであるという信仰理解に基づくであろう。そうすると、ティラヌスの状況に直面して忍耐して精神的に委縮するあるいは呑み込まれるのではなく、それを乗り越える称賛すべきあり方が語られている。それは、忍耐することにとどまらずに苦難を乗り越える生き方を指し示す。そうであれば、その生き方は、カントの積極的な道德のダイナミズムに繋がるであろう。それゆえに、バルトルスは忍従を語っているようには見えない。第1章第1節は、ティラヌスに直面する人々に視点を当ててそのあり方を論じているのではないかと思う。

② 「法によらずに支配する」ティラヌス

第2章第2節の見出しには、「ティラヌスは、国家（*communi Reipublicae*）を法によらずに（*non iure*）支配する」とある。ここでは「国家」（*communi Reipublicae*）と「法によらずに」（*non iure*）は重要な用語である。そして、バルトルスは、ローマ教皇グレゴリー1世（*Gregorius*, 540頃-604）の著作「モラリア」（*Moralia*）第11章⁽⁹⁰⁾の言葉にならって、「本来ティラヌス（*proprie tyrannus*）は、国家を法によらずに支配する」という（第2章第2節）。それゆえに、まさに、「グレゴリーの言葉は法として順守されるべきである」（第2章第3節の見出し）。したがって、グレゴリーに即してティラヌスが展開されるはずである。

法を基準とした場合、こうも言われる。すなわち、「たとえばいわば王（*Rex*）あるいはローマ皇帝は正しく、真実で、普遍的であるけれども、しかし、もしあるものがその地位を不当に獲得しようとするなら、そのものは本来ティラヌスと呼ばれる」。それゆえに、王と本来ティラヌスとは対比されている。王は法によって支配する存在になるが、本来ティラヌスは「法によらずに支配する」、「法を侵害する」。彼は「称号が欠けているからであり、法によって選ばれているわけではないからである」（第2章第3節）。

③ 「高慢」というティラヌス

バルトルスによって「法によらずに」という論点だけでなく、新たな論点「高慢」が提起された。というのは、バルトルスは、「あらゆる高慢なものが固有なや

(90) 教皇グレゴリー1世のデジタル化された文献は判読に堪えないので検討できなかった。それに関する研究はあるだろうが私には不明であった。

り方でティラニス〔暴虐〕を行う」（第2章第2節）というからである。以上をわかりやすく言えば、「大きな悪をなしたいが、しかし、強力な権力を欠如している、そういう人の傍らにはティラヌスがいる。不条理がその人の内部で支配しているからである。というのは、もしも、外面的に隣人を破滅させ、しかし、破滅させるべく内面的に権力を持とうとしているならそれで十分だからである」（第2章第2節）。そして、この「高慢はあらゆる悪の根源」（見出し4）であって、そのようなティラヌスは国家、都市、地方、家、自己自身の5種類に現われるとさえ言われる（第2章第4-5節）。

たしかに、バルトルスは「高慢」という道徳的な側面に重きを置いてティラヌスを見ているようだが、しかし、ティラヌスに「少しばかり批判的な眼を向けよう」（*aliquantulum discutiamus*）⁽⁹¹⁾ともいっている。もしそうであれば、彼は文脈をこの点で変えようとしているかもしれないから、その変化を探してみよう。

まず先にいわば確認として次のことを見ておきたい。すなわち、バルトルスは、グレゴリーが「国家」における「法によらない支配」というティラヌスの定義を紹介しながら、「高慢なもの」の支配という意味でのティラヌスを述べている。この高慢の特徴は、ティラヌス自身のすなわち「自己の内側」では隣人を不幸にするべく権力をもとうとし、「固有なやり方で」暴虐（ティラヌス）を行うところにある。しかし、そのティラヌスの思いは第2章第2節によれば「自己の内側」（*apud se*）に隠れている（*latens*）ので他者にはわからない。それでは、バルトルスは内側のことだけにティラヌスの理解を留めているのか。そうは思えない。なぜなら、興味あることに、たしかに、見出し2は、国家におけるティラヌスの特徴を「法によらずに」に見ているが、しかし、本文の第2章第2節には、ティラヌスは、隣人を苦しめる権力志向を持っていて、「自己の内側」に隠れているだけのものではないと解される余地がある。このことは第2章第3節から第7節にかけて明確にいわれている。以下これを述べてみよう。

すなわち、バルトルスは、本来ティラヌスが「国家を法によらずに支配すること」というグレゴリーの定義を維持しながら、他方で本来ティラヌスを「高慢なも

(91) *discutio* は「打ち砕く」という意味をもっていて、それが「いくらか」という修飾を受ける。そのために、完全に打ち砕くわけではない。意識する必要があると思う。エマーソンは *briefly consider* と訳している（Emerton, p.127）。

のが固有なやり方でティラニスを行うこと」（第2章第2節）と述べているとき、たしかに、バルトルスは「高慢なもの」は客観的ではなく自己自身の内的認識にとどまり、他者は知らないで、「自己の内側」に隠れているだろう。また、「国家を法によらないで支配すること」というときの「法」は「称号が欠けている」とか「法によって選ばれていない」とかであるという例示に言及するが、それとても自己自身の認識にとどまるかもしれない。ところが、高慢は、あらゆる悪の根源であって、5種類のティラヌスに「現れる」といい（第2章第4-5節）、「ティラヌスの現実」⁽⁹²⁾は人々をひどく苦しめることにあるといわれる（第2章第7節）。それゆえに、第2章第5-7節において、飢えや拷問で人々を苦しめることが5種類のティラヌスの現実であるから、もはやそうしたティラヌスは高慢として「自己の内側」に留まるものではありえなく、まさに他者が認識できる外界の苦痛に満ちた出来事である。バルトルスは、したがって、グレゴリーの定義を国家から他のものにも拡大したのである。

④ 今日まで影響する定義

バルトルスのティラヌスの定義のうち、今日まで影響したものに眼を向けてみたい。

これまた興味深いことに、彼は5種類のティラヌスの内都市のティラヌス（*Tyrannus civitatis*）にとりわけ関心を向けていて（見出し12）、国家のティラヌスに相当する一般的なティラヌス（*Tyrannus generalis*）には言及していない。しかし、エマートン⁽⁹³⁾は *Tyrannus civitatis*（第5章第12節）を *commonwealth* における *tyrant* の一つとしている。つまり都市のティラヌスを国家のティラヌスである一般的なティラヌスで検討している。そして、バルトルスは、都市には「執行における」（*ex parte exercitij*）ティラヌスと「称号の欠如した」（*ex defectu*

(92) 「ティラニスの現実」は *actus Tyrannicus* の訳であるが、このラテン語句の直後に、*actus Tyrannici* がある。関係の語文は *Multi alij sunt actus Tyrannici*, である。ところで、*Tyrannici* は形容詞 *Tyrannicus* の複数形主格で複数主格男性 *actus* を形容すると考えられる。この語文は次のように訳せる。「その他たくさんさんのティラニクスな現実がある。」そうすると、上述の語文までは *Tyrannus* が論じられてきて、この語文において *Tyrannicus* がいわれるとすれば、*Tyrannicus* は *Tyrannus* の形容詞と理解できるから、*Tyrannicus* は *Tyrannus* の行為や状態を表わすであろう。そうすると、*Tyrannicus* の意味は「ティラヌスの」か「非道な」／「圧政的な」とかであると考えられる。

(93) Emerton, *Humanism and Tyranny*, p.132.

tituli) ティラヌスとがあるという (第 5 章第 12 節)。したがって、バルトルスは、二つのティラヌスの区別を都市すなわち国家において考えている。

この二つのティラヌスの例示は第 6 章第 15 節以下で行われている。すなわち、まず第 6 章の見出しによるなら、「民衆には、いかに暴力と恐怖がもたらされるか」(Violentia, vel metus qualiter referatur in populum.)⁽⁹⁴⁾。それだから、騒動や反乱によって (rumore et seditione) 支配者になったものや、他国の軍隊の支援を得て戦い国を獲得して⁽⁹⁵⁾ 支配者になったものは称号の欠如したティラヌスであると判断される (第 6 章第 15 節)⁽⁹⁶⁾。

もう一つの「正当な称号を持っている」ものを執行におけるティラヌスという

(94) Bartolus, De tyrannia, p.321.

(95) 該当のラテン語の箇所は cum gente forensi pugnando expugnavit civitatem (Bartolus, De tyrannia, p.323) である。その中の cum gente forensi pugnando の訳が問題になる。というのは、pugno の使い方では、cum は目的語において戦う相手を示すからである。すなわち、「……と戦う」。「ストア派は逍遙学派と相容れない」(pugnant Stoici cum Peripatetics) (『古典ラテン語辞典』国原吉之助、大学書林、2005 年 611 頁) のごとし。しかしそれでは関係する文の意味がとれるであろうか。若干検討してみたい。文章としては、後半の expugnavit civitatem が主文である。それは「都市を倒した／獲得した」(「都市」=「国」) である。forensi/forensis は辞書的には「公会場の、市場の」「広場の」であり、また「戸外にいる」(draußen befindlich, in: E. Habel/ F. Gröbel, Mittellateinisches Glossar, Schönigh1989, S.156) である。ところで、foris の一つには「戸、門、入口」は自宅／自国へのものを意味し、もう一つには「外で、外国で」を意味する。そうすると、forensis を foris と同様に訳せる。その forensi の形容する gente/gens は「人々、軍隊」(Ibid., S.165) である。そうすると、gente forensi は「外国の軍隊」あるいは「外国の人々」と訳せる。pugnando は動名詞奪格とすると「戦い」と動詞的に訳せる。したがって、cum gente forensi pugnando expugnavit civitatem は「外国の軍隊の支援を得て戦い、その〔戦う〕ものは都市／国を獲得した」と訳せるので全体として文意は取れる。ところが、cum の目的語を戦う相手をさしているとするなら、「外国の軍隊と戦いその〔戦う〕ものは都市／国を獲得した」となる。そうすると、外国の軍隊は都市を支えていることが前提になっている。それゆえに、主語「その〔戦う〕もの」は外国の軍隊から都市を解放したことになり、おそらく解放者である。これではその〔戦う〕ものを支配者として称号の欠如したティラヌスとは言いにくい。例示とは考え難い。

(96) 第 6 章第 15 節「その人がティラヌスであると判断される〔、そういう〕ことは、それゆえに、上述のところから明らかである」(“§15 Apparet ergo ex praedictis, modus probandi quem esse Tyrannum.”, in: Ibid.). この modus probandi は文法的には probatio の受動態を表わすと考えられ (modus, in: Langenscheids Taschenwörterbuch Lateinisch-Deutsch, Langenscheid 1979, S.336; modus, in: A Latin Dictionary, by Charlton T. Lewis and Charles Short, Clarendon 1966/1879, p.1157). modus は名詞の「方法」(method) (すなわち「誰がタイラントであるかを決定する方法」) (Emerton, ibid., p.134) ではない。

のはあまり適切でないが、「執行におけるティラヌスは、その行為によって共通善（*bonum commune*）にしたがって歩んでいない」ものである（第8章27節）と定義される。したがって、執行におけるティラヌスは、共通善を損なうその行為が問われるから、暴虐の行為の所為のみならず支配の正当性を持たないところの称号の欠如したティラヌスとはまったくティラヌスの内容を異にしている。それゆえに、おそらく共通善の破壊や人々の権利侵害ということでは通底しながら支配の正当性如何で相違するところにそれら二つのティラヌスそれぞれの個性があるであろう。

なお、本稿の関心はこの二つのティラヌスの法理的起源を知ることにあつた。この確認を以上によってできたので本稿にとっては話はこれまでで十分であろうと思ひ、バルトルスの「ティラニア論稿」第5章以下の詳細な分析は別稿で行いたい。なお付言しておく、たしかに、バルトルスはティラヌスの発生と除去の条件を法学的に検討していてティラヌスのいわゆる暴君殺害（*Tyrannenmord, tyrannicide*）を論じていないが、それでも、彼は、一言「人民が敗北することなく、正義を述べてティラヌスが倒される……事件（*casus*）が起きる」⁽⁹⁷⁾と記録しないではおれなかったようである。

⑤ ティラヌスの異なる表現

さて、同じティラヌスでありながら異なる意味が二つで表現される。このことを本稿は二つのティラヌス論と呼ぶ。そこで、私は次のようにする。「執行におけるティラヌス」とは王など称号をもっていることが前提にありその執行に際して暴虐な行為をするティラヌスがいわれる。そこでこの場合のティラヌスを「執行における暴君」と呼ぶ。そして、「称号を欠如したティラヌス」とはそもそも王などの称号をもっていない、選挙で選ばれてその地位に付いていないところで自らを王などと僭称（「僭」は「僭」の異体字）するティラヌスがいわれる。それでこの場合のティラヌスを「称号を欠如した僭主」と呼ぶ。そのように、ティラヌスを「暴君」と「僭主」に割り振る⁽⁹⁸⁾。日本語表記としては「^{ティラヌス}暴君」と「^{ティラヌス}僭主」とする。

(97) “§34 interim casus occurrit, , suadente iustitia, sine populi detrimento deponetur Tyrannus”, in: Bartolus, *De Tyrannia*, p.326

(98) 「暴君」と「僭主」の訳語の問題については詳しくは笹川「国際協調主義と歴史の反省」、260頁以下参照。

2. バルトルスを受け入れと展開

(1) バルトルスの現れる文献

① ブルトゥス『ヴィンディキアエ』1579について

バルトルスの名前が頻繁に登場するのはおそらく宗教改革の時代であろう。以下二つのティラヌスの関係をめぐって参考になる文献を検討しておきたい。

まず見なければならないのは次のものである。Vindiciae, contra Tyrannos: sive, De Principis in Populum, Populique in Principem, legitima potestate, Stephano Iunio Bruto Celta, Auctore. Edimburgi, 1579 (454689181–420: Printed and bound in India for SN Books World) (=Brutus/Vindiciae; ブルトゥス『ヴィンディキアエ』)。また、1610年のアムステルダム版もある（インターネットのデジタル版）。その他フランス語版もある。ドイツ語翻訳では次のものがある。Stephanus Junius Brutus, Strafgericht gegen die Tyrannen oder die legitime Macht des Fürsten über den Fürsten, in: Beza, Brutus, Hotman, Calvinistische Monarchomachen, Übersetzt von Hans Klingelhöfer, Herausgegeben und eingeleitet von Jürgen Dennert, Westdeutscher Verlag, 1968 (=Brutus/Dennert)。新しい英訳では次のものがある。Vindiciae, contra tyrannos, or, concerning the legitimate power of a prince over the people, and of the people over a prince, Edited by George Garnett, Cambridge 1994 (=Brutus/Garnett)。ハロルド・ラスキ (Harold Laski, 1893–1950) の自由な英語訳もある。日本語翻訳では次のものがある。ステファヌス・ユリウス・ブルトゥス著城戸由紀子訳『僭主に対するウインディキアエ、神、公共的国家、人民全体それぞれの権利の回復を僭主に抗して請求する』、東信堂、1998年 (=ブルトゥス/城戸)。

Brutus/Vindiciae, 1579を単にブルトゥス『ヴィンディキアエ』あるいは『ヴィンディキアエ』と呼ぶが、これは、聖書や古い文献をたくさん用いているために現代に対する意味を見つけにくいと思う向きもあるであろう。また、モナルコマキすなわち暴君放伐の代表的な文献として近寄りがたいと感じる向きもあるだろう。しかしその印象は表面的であるといわなければならない。本稿はブルトゥス『ヴィンディキアエ』そのものを研究しようとしているわけではなく、そこに示されたバル

トルスの射程の中で二つのティラヌス論を描こうとする。それにしても、同書が契約論をその理論構成の核心に据えていることからして、そのティラヌス論すなわち抵抗権論には今日への重要な示唆がある。

たしかに、ブルトウス『ヴィンディキアエ』はバルトルスの「ティラニア論稿」に言及している。すなわち、p.171の欄外、p.178の欄外、p.181の欄外、p.194の欄外の4カ所においてである。なお、バルトルスの他の著作も言及されているがここでは検討しない。さて、「ティラニア論稿」は、de Tyrannide (p.171)とあってde Tyranniaではない。そして、de Tyrannid. (p.178)、de Tyrann. (p.181)、de Tyran. (p.194)というように略語で言及される。また、Brutus/Garnettは同書名をde Tyranno (p.48, 140 and 145)という。またブルトウス／城戸訳はバルトルス『僭主政論』（235頁）という。Brutus/Dennertは「ティラニア論稿」をÜber die Tyrannis (S.165, 169, 171 und 178)というように独訳していてタイトルの原型を示していないのでどのように原型を認識しているかは不明である。こうしてみると、タイトルの原型が西欧でなぜ一定しないのかは引用に際して難しい問題であるが、事実として受け入れざるを得ない。

② ブルトウス『ヴィンディキアエ』における二つのティラヌス論

まず該当の重要な箇所は次のようである。なお、文章には特定される番号はないので、本稿では、説明の便宜上頁に即して段落から適宜文章ごとに「§1」のごとく番号を振る。そして、一般的にいうときにはtyrannusは「ティラヌス」と表示し、文脈によって「僭主／暴君」や「^{ティラヌス}僭主／^{ティラヌス}暴君」と表示することもある。資料としては次のものがある。

p.170 §1 すでにこれまで我々は王を論じてきたから、いくらか詳しくティラヌスを論じよう。**§2** 王とは、家系によってあるいは選挙によって譲渡され、かつ慣例に従って委託された王国を、正当に (legitime) 支配し統治するものであると述べた。**§3** したがって、暴力と悪いたくらみによって (vi malique artibus) 国家を侵略し (invasit)、または、**§4** 託された王国を自分から (ultra sponteque) 法と天の定め (ius et fas) に反して支配し、聖なるものに誓って自ら負った法令と協約に反して頑なに執行する、そういうものは (**§3** と **§4**) ティラヌスであり、したがって王とはまったく異なったものである、こういうことが帰結する。

欄外注：アリストテレス『政治学』第 5 巻第 10 章。バルトルス「ティラヌス論稿」。**§5** むろんどちらも同一人物の中では起こりうる。**§6** 前者は一般に称号を欠如した僭主（*tyrannus absque titulo*）といわれ、後者は執行における暴君（*tyrannus exercitio*）といわれる。**§7** 本当に、暴力で占領された王国を正しく支配することがあり、また法に従って譲渡されたものを不当に支配することもありうる。**§8** だがたしかに、王権は相続財産である以上に法（*ius*）であり、所有（*possessio*）である以上に機能（*functio*）であるから、その義務（*manus*）を悪く執り行う者は、正式にその義務を受け取った者以上にそれ〔前者：^{ティラヌス}僭主〕に似つかわしい。**§9** 悪く（*male*）侵入した（*ingressus*）教皇は侵入者（*intrusus*）といわれ、悪く統治するものは濫用する（*abutens*）といわれる⁽⁹⁹⁾。

以上の文章によるなら、『ヴィンディキアエ』は王を定義して、家系や選挙によって適法に託された王国を正当に支配・統治するものという（**§2**）。この定義から暴力的に国家を侵略するティラヌス（**§3**）すなわち「称号を欠如した僭主」（*tyrannus absque titulo*）と、託された王国を自分から法に反して支配し執行するティラヌス（**§4**）すなわち「執行における暴君」（*tyrannus exercitio*）との区別を導いている。そのために、たしかに「執行者としての（*ex parte exercitij*）ティラヌスと称号を欠如している（*ex defectu tituli*）ティラヌス」というバルトルスと『ヴィンディキアエ』とでは表現の仕方では相違するが、しかし、意味内容では同じと理解されている。それゆえに、『ヴィンディキアエ』は、中世のティラ

(99) **§1** Iam cum hactenus regem descriperimus; se quitur, ut Tyrannum paulo accuratius describamus. **§2** Regem eum esse diximus, qui regnum sive per stirpem, sive per electionem delatum, rite que commissum, legitime etiam regit at que gubernat. **§3** Eum itaque tyrannum, utpote regi plane contrarium esse, sequitur, qui aut vi malique artibus imperium invasit, **§4** aut ultro sponteque delatum regnum contra ius & fas regit, contraque leges & pacta, quibus sese sacrosancte devinxit, pervicaciter administrat. [Note: Arist. c.10. lib.5. Polit. Bartol. in tract. de Tyrannide.] **§5** Quod etiam utrumque in unum eundemque hominem cadere potest. **§6** Ille ulgo dicitur Tyrannus absque titulo, hic Tyrannus exercitio. **§7** Potest vero fieri, ut & vi occupatum regnum, iuste; & iure delatum, iniuste quis regat. **§8** At certe cum regnum ius sit magis, quam haereditas; & functio, quam possessio; videtur, qui suo munere male fungitur, quam qui munus non rite accepit, eo nomine dignior. **§9** Sic Papa male ingressus, dicitur intrusus; male gubernans, dicitur abutens., in: Brutus, Vindiciae, p.170–171.

ヌス論を近世のティラヌス論に橋渡しをしたというべきだと考える。

③ ティラヌス論と抵抗権論

『ヴィンディキアエ』のティラヌス論にはバルトルスには明確にされていないかった抵抗権とのかかわりが表れている。該当の基本的な箇所は次のようである。

p.182 §1 我々は以下のことを見た。すなわち、**§2** いかにして王は神によって選ばれるのか、すなわち、長に従ってか (*secundum capita*) ⁽¹⁰⁰⁾、また家系に従ってか、全人民から立てられてか、**§3** 王や王の役人は、何を果たすように義務付けられるのか、**§4** その権力はどれほどあらわであるか、これらの活動と務めとはどれほどであるか、**§5** 誓約した協約は立てられる王に対してどれほど障害になるか、そして、暗黙のあるいは明示的などんな条件が協約には内在しているか、**§6** 最後に、称号を欠如した ^{ティラヌス} 僭主 (*tyrannus absque titulo*) は誰か、その上執行における ^{ティラヌス} 暴君 (*tyrannus exercitio*) は誰か。**§7** 神に対しても人民に対してもその職務をよく果たす正当な王にはいわば神にするとく服従しなければならないのだから、次の結論しかない。すなわち、**§8** 誰によって (*per quos*) ^{ティラヌス} 僭主／^{ティラヌス} 暴君には抵抗がなされる (*resisti*) か、法的にはどんな方法によって (*quibus modis*) [抵抗が] 可能であるかを詳しく論じよう。**§9** そして、称号を欠如した ^{ティラヌス} 僭主と一般にいわれるものについて、まず論じられるべきである ⁽¹⁰¹⁾。

(100) Brutus/Garnett は、*secundum capita* をなぜか「[*secundum capita*]」としていて (p.148)、訳では「個人」(*individuals*) としている。Brutus/Dennert もまた訳としては「個人」(*Einzelpersönlichkeiten*) (S.172) としている。プルトゥス／城戸は訳としては「人物による」(173 頁) としている。*capita* は *secundum* の対格 *caput* と考え、「長、首領、首謀者」(田中『羅和辞典』91 頁) とあるので「王」の選択の文脈に沿って「長」を選ぶ。なお、国原『古典ラテン語辞典』95 頁にはより詳しく「首長、頭(かしら)、指導者、元凶、張本人」の訳がある。

(101) **§1** Vidimus, quomodo reges, **§2** sive secundum capita, sive etiam secundum stirpes eligantur a Deo, & constituentur ab universo populo, **§3** quid rex, quid regni officarij prestare teneantur, **§4** quantum pateat illius potentia, quantum etiam horum munus & officium, **§5** quae pacta quamque sancta in rege constituendo intercedant, & quae iis conditiones insint, sive tacitae, sive expressae; **§6** demum, quis tyrannus absque titulo, quis etiam exercitio: **§7** sequitur modo tandem, cum legitimo Regi, suoque officio tum erga Deum, tum etiam erga populum bene fungenti, tanquam Deo obediendum esse constet; **§8** ut, an, & per quos, tyranno

§1 は、これまで『ヴィンディキアエ』で述べてきたことを§2 以下で要点として示しているとも考えられる。たしかに、p.170 §2 と同じく p.182 §2 でも王の定義では変わらないように見える。そして、p.170 §4 における二つのティラヌス論と p.182 §5 における二つのティラヌス論は一致する。そして、興味深い新しいことは、これらのティラヌス論が p.182 §7 において抵抗 (*resisti/resisto*) と結びつけられたことである。

この結びつきに気付いたヘンチュの研究⁽¹⁰²⁾は『ヴィンディキアエ』そのものの性格を次のように指摘する。すなわち、それは、カルヴァンの後継者ベザ (*Theodor Beza*) の『執政官の法』(*De iure magistratuum*, 1574) の議論をベースにして「ユグノーのモナルコマキの抵抗思想の頂点を極め、まさに抵抗権を広範にわたって他に依存することなく (*weitgehend unabhängig*) 世俗的に根拠づけている」、そして、「代表者の姿をとった人民が支配に参加し支配者を法的に拘束するという契約的な解釈」において「人民と支配者の相互的義務と相互関係の契機」を強調している、「それゆえに、抵抗論は契約的基礎を持っている。」「モナルコマキは、身分制国家の既存の秩序に自らを合わせているわけではなく、焦点を合わせているのは、近世の契約論とは違って、支配の正当化よりも支配の制限である。」

そうすると、彼の研究の指摘する「支配の正当化」と「支配の制限」とはまさに、時代を超えて、今日の国民主権の憲法論を解説するのに有益になる。なぜなら、とかく権力者は自らの主張の根拠を憲法に基づくと「正当化」して自らが「制限」を受けている存在であることを忘れるからである⁽¹⁰³⁾。なお、「近世の契約論」とは

resisti, quibusq; modis iure possit, edisseramus. §9 Ac de eo, qui absque titulo tyrannus vulgo vocatur, primum agendum est.

(102) Frauke Höntzsch, *Die klassische Lehre vom Widerstandsrecht*, in: Birgit Enzmann, Hrsg. von, *Handbuch Politische Gewalt, Formen — Ursachen — Legitimation — Begrenzung*, Springer 2013, S.82ff. それに比して、シュトリカーによる『ヴィンディキアエ』の抵抗権の説明は平板に思えるが、抵抗に関して臣民の代表機関に対する身分制社会の従属的な制約の詳しい説明は興味深い (*Günter Stricker, Das politische Denken der Monarchomachen. Ein Beitrag zur Geschichte der politischen Ideen im 16. Jahrhundert*, 1967 (Heidelberg Diss.), S.170–177)。

(103) 詳しくは後述するが、笹川「憲庭訴訟の原点—権力によって選ばれた時と国民の決意する時」法律時報 2016 年 88 巻 9 号通巻 1102 号、2016.8、64–65 頁は、鳩山一郎や土屋正忠議員は市民と同様に言論の自由を有するといって憲法改正を主張する根拠に議員の言論の自由をあげているが、言論の自由は本質的に国民の権力からの自由 (国会議員の権力からの自由をも含む) であるから、国会議員がいたいことをいう自由ではな

おそらく『ヴィンディキアエ』の次の世代のホップズのレヴァイアサンの思想を指しているであろう。

ヘンチュは『ヴィンディキアエ』の基本的性格だけでなく、二つのティラヌス論の分析にも言及していて注目される。すなわち、彼は、バルトルスの二つのティラヌス論の根拠を「トマスの体系化の継承」(Thomas' Systematisierung fortführen)⁽¹⁰⁴⁾ととらえている。トマスへの遡及自体は後述するように珍しくはないが、次のようにいうことは注目される。すなわち、

「プルトゥスも、〔A〕暴力あるいは悪いたくらみによって統治を篡奪したティラヌスと、〔B〕自己に自発的にそして喜んで渡された国家を神法と人法に反して支配し神聖なものに誓って義務を負った法令と協約に背いて頑なに執行するティラヌスとを区別している。〔C〕トマスと同様、彼はしかしながら篡奪者が人民の同意を得て後から適法な支配者になりうるということから出発している。そして、〔D〕プルトゥスにおいても、原因または惹起者次第であるために、抵抗の行為者と手段とは相違する。」（〔A〕―〔D〕は本稿の付加）

すなわち、ヘンチュが、プルトゥスのいう二つのティラヌス（〔A〕と〔B〕）の区別に言及していることは、『ヴィンディキアエ』の二つのティラヌス論の繰り返しにすぎないが、その根拠が相対化されている。というのは、トマスを根拠にして篡奪者が後から適法な支配者になりうる（〔C〕）といわれるからである。そうすると、抵抗は原因とその原因をもたらしたものとに左右される。この目でヘンチュを見ると、もちろん『ヴィンディキアエ』で詳しく述べられているが、プルトゥスの主張として、次のように簡略にいわれることはそれだけ定型化されたのではないかという気がする⁽¹⁰⁵⁾。研究史としては意味があるから紹介する。

一つには、不当な支配を導くものに対しては（〔A〕）、それを防ぐことは「すべての任意の私人に許されている」。暴君殺害（Tyrannenmord）が許される。緊急時に祖国が救われる。個人主義的な抵抗権が新たな基礎をえることになる。

二つには、もともと正当な支配者でその墮落した状態のものに対する（〔B〕）集団的な抵抗権は、個人主義的な抵抗権とは異なる。これは、人民の権利と特権を保

く、国民が批判追及して議員をも拘束することを指摘した。

(104) Höntzsch, *ibid.*, S.85, note 52.

(105) *Ibid.*, S.85ff.

護し、支配者が人民を破滅するようにはなにもしないように留意する諸身分（等族）／代表者にのみある。篡奪者にたいしてのみすべての任意の私人が自己の判断で行動できる。

三つには、祖国と共同体の敵に対して暴力その他あらゆる手段をとるようには人民に呼びかけるのは代表者である諸身分の決断にかかり、暴力をもって行動するものは全人民である。

こうしてみると、バルトルスの明確にしなかった侵略者＝篡奪者に対する抵抗権は『ウインディキアエ』において明確に展開された。国民一人一人の権利として論じられた。それでも、その発動の契機にかんしては人民の代表者が決定権を行使したということにはなお時代の制約を認めざるを得ないだろう。

(2) ボダン『国家 6 篇』1583/1577 について

① ボダンにおけるバルトルス

Jean Bodin, *Les six livres de la République*, Deuxième Réimpression de l'édition de Paris 1583, Scientia 1977 (=Bodin, *De la République*; ボダン『国家 6 篇』). 独訳では Jean Bodin, *Über den Staat*, Reclam 1976 を用いる。

さて、ボダンと『ウインディキアエ』の関係は不明であるが、ボダンはバルトルスの名前を『国家 6 篇』第 2 篇第 5 章の欄外注において記して **tyran** すなわちティラススを定義している。しかし、彼は、1577 年の初版（インターネットによる）ではバルトルスの名前も著書も欄外に記さず、第 2 版にあたる 1583 年版と同じく プルタルクス（**Plutar.**）を掲記しているのみである。それゆえに、バルトルスの名前は第 2 版からとなる。ちなみに、1594 年のラテン語版、333 頁には欄外注においてバルトルスの名前と著書が出ている。

ところで、ボダンは『国家 6 篇』第 2 篇の第 4 章と同第 5 章でティランを定義しているから、2 回定義していることになる。しかし、第 4 章と第 5 章の二つの関係について特段議論していない。そのために理論枠組みははっきりしないがその定義を見るとそれぞれバルトルスの二つのティラスス論に対応させることは可能であり、同時に『ウインディキアエ』の二つのティラスス論にそうすることも可能である。そのためにまず以下にその定義をそれぞれ紹介してみよう。

② ボダン『国家 6 篇』第 4 章第 5 章

第 4 章の方から見てみよう。その章のタイトルは「ティランな君主について」

(De Monarchie Tyrannique)である。そこでは次のようにいわれる。「ティラン
な君主は、自然法を足蹴にし、自由民の自由を奴隷のもののように、そして、他人
の財産を自分のもののように濫用するものである」⁽¹⁰⁶⁾。

第5章のタイトルは「ティランの身体に危害を加えることが適法で、そして、そ
の死後法令を無効にでき破棄できるかどうか」⁽¹⁰⁷⁾である。そこでは次のようにい
われる。「ティランは、選挙なく、継承権なく、くじ引きもなく、正しい戦争もな
く、神の特別な召しもなく、自己の力によって (de sa propre autorité) 自らを主
権的君主とする者」である⁽¹⁰⁸⁾。そして、かかるティランは殺害されうる (Cas
licites pour tuer le tyran.)⁽¹⁰⁹⁾。

これまでのバルトルスと『ヴィンディキアエ』における二つのティラヌス論から
すれば、第4章でいわれるティランは「執行における^{ティラヌス}暴君」に、第5章でいわれる
ティランは「称号を欠如した^{ティラヌス}僭主」に相当する。ところで、佐々木毅が、ボダンの
定義を「資格の欠如に基づくティラン tyrannus ex defectu tituli」という⁽¹¹⁰⁾と
き、それは称号を欠如した^{ティラヌス}僭主にあたる。執行における^{ティラヌス}暴君への言及はない。

(106) “La Monarchie Tyrannique, est celle où le Monarque foulant aux pieds les loix de nature, abuse de la liberté des francs subiects, comme de ses esclaves, & des biens d’ autrui comme des siens”, in: Bodin, De la République, p.287; Bodin, Über den Staat, S.53. なお、英訳ではこれら第4・5章は省かれている。ラテン語版は詳しい。すなわち「一人のひとが、尊大な支配 (legibus) によって神と自然を、自分のもののように他者の財産を、そして欲望のために奴隷のように自由民を濫用する (abitur) なら、それはティラヌスである」(Tyrannis est, in qua unus homo divinis ac natura legibus sublatis, rebus alienis ut suis, & liberis hominibus quasi mancipiis ad libidinem abutitur, in: Ioan. Bodini Andegavensis, De Republica Liberis, Latine, Lib. II, IV De Tyrannide, 1594, p. [321])。

(107) “S’il est licite d’attenter à la personne du tyran, & apres sa mort annuler & casser ses ordonnances., in: Bodin, De la République, p.297; Bodin, Über den Staat, S.56. ドイツ語でもっと直截にいわれる。すなわち「ティランの殺害とその法令の無効が死後に許されるかどうか」。

(108) “Nous avons dit, que le tiran est celuy, qui de sa propre auctorité se fait Prince souverain, sans election, ny droit successif, ni sort, ny iuste guerre, ny vocation speciale de Dieu”, in: Bodin, De la République, p.297–298.

(109) Jean Bodin, Les six livres de la République, 1583 (=Bodin, De la République), pp.297. 各種英訳がある。そして独訳は、Jean Bodin, Sechs Bücher über den Staat, Buch I-III. Übersetzt von Bernd Wimmer, Eingeleitet und herausgegeben von P. C. Mayer-Tasch, 1981. なお、Jean Bodin, Über den Staat, Reclam, 1976 (=Bodin, Über den Staat), S.56f.

(110) 佐々木毅『主権・抵抗権・寛容』岩波書店、1973年124頁。

そして、ボダン¹¹¹は、人々に正しい王と残酷なティランの区別を求める。神と自然の法の制約がある君主はティランとみなされてはならない、ティランの身体に攻撃を加えてもいいかどうかをよく考えよと呼びかける。その結果、クヴァリツチュは、執行における^{ティラヌス}暴君には殺害が認められないから、人は「逃げる、隠れる」、そして、邪悪で残酷であってもその「適法な主権者を殺すよりもむしろ死を被らなければならない」という⁽¹¹¹⁾。

こうしてみると、ボダンはすでに述べた二つのティラヌス論の定型化された用語は用いていないとしても、第4章と第5章の叙述はすでに確立しているものに基づいているといえるだろう。

(3) アルトジウス『政治学』1614/1610/1603について

① アルトジウス『政治学』1603年初版

そして、次のものがある。Johannes Althusius, *Politica, Methodice digesta atque exemplis sacris et profanis illustrata*, 2. Neudruck der 3. Auflage, Herborn 1614 (Althusius, *Politica*, 1614; アルトジウス『政治学』). 必要に応じて英独訳を使う。

ところで、『ヴィンディキアエ』と同じくカルヴィニスト・モナルコマキの影響を受けたアルトジウス (Johannes Althusius, 1557–1638) は、どのようにパルトルスを使うか。これが当面の疑問になる。パルトルスはアルトジウスにあつてはたしかにその『政治学』初版1603年と第3版1614年版で引用されている。しかし、その引用の仕方はそれぞれ異なる。なお、第2版は第3版に吸収発展される。

初版では次のようにいわれる。なお、英訳と独訳でも初版の引用には言及がない。

「そこで、執政官に抵抗することが誰に許されべきかを見るだろうといった。最高執政官と見られたい、言われたい、思われたいその人は、しかし、実に称号を欠如した^{ティラヌス}僭主 (tyrannus absque titulo) か執行における^{ティラヌス}暴君 (exercitio tyrannus) かである⁽¹¹²⁾。」

この文章の後に出典としてこうある。すなわち Bart. in tract. de tyrann.

(111) Hermut Quaritsch, *Staat und Souveränität*, 1970, S.321.

(112) “Deinde dixi, videndum, cui Magistratui resistere concessum sit. Illi nimirum, qui cum summus Magistratus videri velit, & dici, & haberi, est tamen revera tyrannus, isq; absq; titulo, vel exercitio tyrannus”, in: Althusius, *Politica* 1603, p.155.

num.12. Stephan. Jun. Brut. in vindiciis contra tyrannos quest. 3. これはイタリックで記載され、次のように述べられる。

「称号を欠如した僭主^{ティラヌス}は、自己自身に託されていない国家を、暴力であるいは悪いたくらみで、何も正当なものなしに、選挙なしに、称号なしに、継承なしに、正しい戦争原因なしに、人民の同意なしに、冒し侵略するものである⁽¹¹³⁾。」
次にもう一つのティラヌスに関して次のように述べられる。

「執行における暴君^{ティラヌス}」は、正当に立てられた執政官であるなら、法や慣例によらずに、統治するものか、職権を濫用する（*abutitur*）か、権威そのものを自己の獲物の方に向けて、自己に許された権力にしたがって圧迫から保護し擁護しなければならないそうした人民から利得を不当に得るものである⁽¹¹⁴⁾。」

当時広まっていたバルトルスのティランを二つに分ける考えを、『ヴィンディキアエ』と同じくアルトジウス初版も受け入れている。この点ではボダンとも異なることはない。ところが、アルトジウス『政治学』第2版の英訳者カーネイ⁽¹¹⁵⁾は第1版とは異なるニュアンスを持つアルトジウス『政治学』第2版のティラヌスについて両版の重要な相違を示唆する。すなわち、

「ワンポイントだけ注釈されるべきである。すなわち、アルトジウスは称号を欠如した僭主^{ティラヌス}（*a tyrant without title (tyrannus absque titulo)*）が少しもタイラントだとは考えていない、王国の敵（*enemy*）である私人だけがそうである。執行における暴君^{ティラヌス}（*tyrannus exercitio*）だけが真のタイラントである。」
そうすると、アルトジウスは二つのティラヌス論を次元の異なるものととらえていて、その二つは決して選択的な関係にはないことが分かる。そのために、アルトジウスのティラヌス論は『ヴィンディキアエ』ともボダンとも異なる。称号

(113) “*Tyrannus absq; titulo est, qui Rempub. sibi non commissam, vi, scelere, vel malis artibus, sine ullo justo, vel electionis, vel successionis, titulo, aut belli justa causa, invadit, sine consensu populi.*”, in: *Ibid*.

(114) “*Tyrannus exercitio est, qui postquam legitime constitutus Magistratus est, non ex lege & moribus gubernat, aut qui abutitur imperio, & ipsam dignitatem in suam convertit praedam, & quaestum facit ex populo indebite, quem ab oppressione ratione potestatis sibi concessae, protegere & tueri debet.*”, in: *Ibid.*, p.156.

(115) Johannes Althusius, *Politica*, Edited and translated by Frederick S. Carney, Liberty Fund, 1995, p.193, note 6, and *ibid*, p.xxiii.

を欠如した^{ティラヌス} 僭主は国家の敵であるからである。このカーネイの意見は、ギールケがアルトジウスの特徴をいうところ⁽¹¹⁶⁾と重なっている。すなわち、ギールケは「法を破り義務を怠る正当な支配者を本来のティランとみる」、そして、*tyrannus quoad exercitium* (*tyrannus exercitio*) すなわち「執行における^{ティラヌス} 暴君」に比べて、通説は、*tyrannus absque titulo* (称号を欠如した^{ティラヌス} 僭主)を「狭い範囲に限定しようとした」が、アルトジウスは、そのティラヌスは「私人がだれでも攻撃でき取り除くことのできる公敵にすぎない」、「取り除く」とは「殺す」ことであった。「この点では、人民主権の信奉者と〔カトリックの〕支配者主権の闘志の間で意見が一致した」。そうすると、アルトジウスは、一方で正当な支配者を抑制する抵抗権を根拠づけるとともに、他方で、人民が全体としての国家を、称号を持たない「公敵」から擁護しようとした。それを示すものがアルトジウス『政治学』第3版(1614年)第38章第68節である。

② アルトジウス『政治学』1614年第3版第38章第68節

ただ注意したいことは、この第68節の叙述だけでなく第3版それ自体でバルトルスが引用されているのは『政治学』第20章第21節においてだけであって、それもそれは「正当な執政官は生きた法であって、もし執政官が法によって有罪とされるなら、自分の声によって有罪とされる。しかし、ティラヌスは生きた法以外のものではない」といわれるからである⁽¹¹⁷⁾。

さて、その第68節は次のようである。

「他からの命令なしにただ一個人の權威に基づいて (*privata auctoritate*)、すべてのかつ個々の (*singuli*) 祖国を愛する貴族と私人 (*privati*) は、国家を侵略する^{invado} 称号を欠如した^{ティラヌス} 僭主 (*tyrannus absque titulo*) に対して抵抗^{resisto}できるしそうしなければならない。

列王記下第11章、歴代誌下第23章、士師記第9章。例えば、この者が外国の (*alienus*) ティラヌスであれば、この者に、人民はいかなる誓約によってもまた法

(116) オットー・フォン・ギールケ『ヨハネス・アルトジウス 自然法国家論の展開及び法体系学説史研究』、笹川紀勝・中間信長・増田明彦訳、勁草書房、2011年37頁。笹川「国際協調主義と歴史の反省」259—260頁。

(117) “Bart. in tract. de tyran. Magistratus legitimus, est lex animata, & si lege damnatur, sua ipsius voce damnatur. At tyrannus, nil minus, quam lex animata.”, in: Althusius, *Politica*, 1614, p.392.

によっても義務づけられはしない。暴力を加える私人であれ侵略者（aggressor）であれその人に、まさに、国家の市民（civis）は誰でも抵抗する。」

アルトジウスにいたって、バルトルスが直接引用されているかどうかはさておき、ティラヌスをめぐる二つの概念の区別はそれぞれ展開される。特に称号を欠如した^{ティラヌス}僭主が外国からの侵略者に向けて述べられたことは、アルトジウスが一貫して侵略にかかわってティラヌスに着目し、^{tyrannus}侵略という用語を使った『ヴィンディキアエ』の称号を欠如した^{ティラヌス}僭主の思想の系譜に忠実であることを意味する。

なお、身分制社会の中にあっても、侵略者への戦いでは「一個人の權威に基づいて」いわば自己責任において抵抗が普通の個人にも可能になっている。身分制社会を超える契機に侵略という大事件があったというわけである。侵略者を前にして国家には能動的に抵抗する「市民」（civis）が析出する⁽¹¹⁸⁾ことは興味深い。

第3部 結びにかえて—バルトルス「ティラニア論稿」の射程：侵略

1. 宗教改革の時代から

(1) カルヴァン：ボハテツの研究から

宗教改革の時代にカルヴァン（Calvin）が法と国家をどう見ていたかは重要な問である。そうした中で、本稿とかかわりあう点は何か。私は、ボハテツ（Bohatec）⁽¹¹⁹⁾がその著書の注81で述べていることに注目する。すなわち、「カルヴァンは、すでにアリストテレスによって提起され、後代の注釈学派（バルトルスとバルドゥス Baldus）によって鋭く研ぎ澄まされた tyrannus absque titulo〔称号を欠如した^{ティラヌス}僭主〕と tyrannus quoad exercitium〔執行における^{ティラヌス}暴君〕の理論に明らかに従っている。」ところが、その注の付いた本文の頁では、tyrannus quoad exercitium すなわち

(118) ホップズが「市民」（de cive）を出版したのは1642年である。いうまでもなく、彼は身分制社会を根底から破壊する点で、漸進的なアルトジウスとは異なる。ここではこれ以上は立ち入らない。

(119) Josef Bohatec, *Calvins Lehre von Staat und Kirche mit besonderer Berücksichtigung des Organismusgedankens*, 2. Neudruck der Ausgabe Breslau 1937, 1968, S.62, note 81.

「行為のティラン」(Tyrann der Tat) についてのみ解説していて、称号を欠如した^{ティラヌス}僭主については触れていない。しかし、ラテン語文では、ロマ書第 13 章第 2 節において「貪欲と略奪に (avaritae et rapinis) ふけっているティラヌス」から「正当な支配者」を区別するといわれているわけではないとある。したがって、ティラヌスが定義されている。

とするなら、カルヴァンが『キリスト教綱要』第 4 篇第 20 章第 11 節⁽¹²⁰⁾で、「少数の者に損害を及ぼすだけの盗賊が罰を受けて当然であるなら、全地域を略奪し荒廃させるものが罰せられずに放置されるべきだろうか。王であれ、民の内の最下層の者であれ、何の権利もない他国を侵略し (irruit)、敵意をもって略奪する者があれば、全て等しく盗賊と看做され処罰されねばならない」とあることに以下 3 点注目したい。

① カルヴァンの「^{latrones}盗賊」とトマスの「^{latrones}強盗」はラテン語では同じ

第 1 の点は、これまで取り上げてきたトマスとのかかわりである。すなわち、カルヴァンの上述の(1)の箇所^②の記述はドゥールの引用した^②のトマス・アクィナスの「強盗」の箇所をただちに想い起させる。カルヴァンは「盗賊」といい、トマスは「強盗」というのは翻訳者の考えと文脈の相違(主格か属格か)が表れているに過ぎない。どちらもラテン語複数で使われているので、複数主格では *latrones*、単数主格では *latro* である。それゆえに、カルヴァンの「^{latrones}盗賊」とトマスの「^{latrones}強盗」はラテン語では同じである。したがって、カルヴァンの「盗賊」への言及はバルトルスのティランの二つの考え方の「^{ティラヌス}僭主」にまったく符合する。刑法では「強盗」の用語を使うので本稿はまとめるときには「強盗」を使う⁽¹²¹⁾。なお、カルヴァ

(120) カルヴァン『キリスト教綱要』改訂版、渡辺信夫訳、新教出版社、2009 年(=カルヴァン・渡辺訳)、547 頁。Joannis Calvini, Opera Selecta, Ediderunt Petrus Barth et Guilelmus Niesel, Volumen V: Institutionis Christianae religionis 1559, librum IV. continens, 1974, p.484.

(121) しかし記憶すべきことに、カルヴイン『基督教綱要』中山昌樹訳、新教出版社、1957/1939 年、458 頁は、渡辺訳と同じく「盗賊」という言葉を当てている。そのために、「盗賊」という言葉を「強盗」で直ちに言い換えていいかどうか、迷う。なぜなら「盗賊」とは「強盗」より広い概念だからである。刑法でいえば、第 235 条は「窃盗」を言い、第 236 条は「強盗」をいう。刑法典にあつてないものがあるわけである。また今日「盗賊」とは歴史的用語あるいは文学作品(「アリババと 40 人の盗賊」のごとし)としてはあるが日常用語で新聞には出てこない。そして、諸橋轍次『大漢和辞典』第 4 巻第 8 巻、大修館書店、1976/1958 年によれば両語とも漢語であるが、「盗賊」の「盗」は

ンそしてトマスそしてさかのぼってアウグスチヌスの関連の研究が当然意識されるがその課題は別の機会の仕事としたい。

② カルヴァンの「^{latrones}盗賊」と「^{latrocinium}盗賊集団」の相違

第2の点はカルヴァンのテキストそのものから考えることである。渡辺訳は、たしかに「少数の者に損害を及ぼすだけの盗賊」と「全地域を略奪し荒廃させるもの」とを区別する。ラテン語版では前者「盗賊」は *latrones* で、後者は「全地域を略奪し荒廃させるもの」といういて特定のラテン語を明示できない。しかしながら後者の該当のラテン語文そのもので、訳を付けてラテン語を少し広くとると次のようになる。すなわち、少数の盗賊が罰せられるのなら、「全地域が略奪され荒廃されるのを盗賊集団の思うままにさせるだろうか」(*an totam latrocinii regionem impune affligi vastarique sinent?*)。したがって、反語的に、「いやいやそういうことはなく、罰せられる」といわれるのである。そのように、後者にあつては「盗賊集団／盗賊一味」(*latrocinii*) が要の単語である。それゆえに、前者では「盗賊」(*latrones*) があり後者では「盗賊集団」(*latrocinii*) があつてその対比が話の骨格を作っているというべきである。「盗賊」は少数の者に損害を及ぼすが、「盗賊集団」は全地域に略奪と荒廃をもたらす。こうした対比を念頭においてもう少し文脈をたどると次のことが重要に思われる。すなわち、

「自然の平衡の理から言っても職務の道理から言っても、王侯たちが軍備を持つことは、私人の悪行を法的に刑によって抑制するためのみでなく、敵意をもって攻撃する者があるときに自らにその保護が託された国を戦争によって防衛するために (*ad ditiones quoque fidei suae commissas bello defendendas, siquando hostiliter imperantur*) でもあるということが示される。このように戦争が正当であることを聖霊は聖書の多くの証言によって宣言したもう。」

上の文章でラテン語文が難解である。参考になるのは、フランス語版である。

「窃盗」にあたり、「財貨を竊むもの」であるが、「賊」は「国法を毀るもの」で「強盗・叛逆並に一切の人命犯に当る」という（第8巻123頁）。「侵略」の歴史的事実からすれば、人命の毀損だけでなく広範な文化財の窃取があったから、狭義の「強盗」よりも「盗賊」の方が「侵略」の文脈に沿うのではないかと思う。ところが、ラテン語では *latro* は「傭兵；追い剥ぎ；略奪者、賊」（田中『羅和辞典』）とある（国原『古典ラテン語辞典』は *latro* を「傭兵；泥棒、追い剥ぎ、辻強盗」とするが、「略奪者」がない）。「侵略」は国家が権力をもって他国の財貨人命を奪うことからすれば、単純な国内犯の「窃盗」では済まないから、「侵略」の分析には「盗賊」よりも「強盗」の方が適切だろう。

Jean-Daniel Benoit によるフランス語版(1560)の校訂本である Jean Calvin, *Institution de la Religion chretinne, Livre Quatrième*, 1961, p.518 と現代語訳の Jean Cadier 版⁽¹²²⁾はどちらも該当のところを次のようにしている。すなわち

aussi pour la défense des pays à eux commis, si on y fait quelque agression

ラテン語の *ditiones* はフランス語で *pays* すなわち「国」と訳されている。そのためにラテン語の *ditiones quoque fidei suae commissas* は「自己の保護を託された国」となり、続くラテン語の *siquando hostiliter imperantur* は、「自国に侵略されるなら」と訳せる⁽¹²³⁾。というのは、*imperantur* は「支配される」であるが、*hostiliter* 「敵意をもって」支配されるとは「侵略される」ことに他ならないからである。そうすると、ここでは「盗賊集団」は戦争によって防衛されるべき侵略者にほかならない。まさに侵略者は少数者に対する盗賊とは質的に相違する。それゆえに、カルヴァンは *latrociniis* をもって侵略をとらえていたと思う。

③ カルヴァンの「盗賊集団」は侵略者

第3の点は、カルヴァンが侵略かどうかの定義を「権利」すなわち「法」から考えていることである。それを示すのが次の一文である。すなわち、「王であれ、民の内の最下層の者であれ、何の権利もない他国を侵略し (*irruit*)、敵意をもって略奪する者があれば、全て等しく盗賊と看做され処罰されねばならない」。「何の権利もない他国を侵略し」とは、ラテン語文では *in alienam regionem, in quam iuris nihil habet, irruit* である。「権利」と訳されたラテン語は *iuris* で、*iuris* は *ius* の属格で *nihil* を修飾する。それゆえに、*iuris nihil* とは *habet* の目的語であるから、「権利の何ものも持たない」を意味する。したがって、侵略者は略奪する国にまったく法的な関係を持っていない。そのために、侵略者も盗賊も相手方とは法的なかわりを持たない点では同じで、「王」であっても「盗賊」と同様だとい

(122) Jean Calvin, *L'institution chrétienne, Livre Quatrième*, Labor et Fides, 1958, p.461.

(123) オットー・ウエーバー訳のカルヴァン『キリスト教綱要』も参考になる。そこでは次のようである。“die Herrschaftsgebiete, die ihrer Obhut anvertraut sind, im Wege des Krieges zu verteidigen, wenn sie feindselig angetastet werden”, in: Johannes Calvin, *Unterricht in der christlichen Religion, institutio christianae religionis. Nach der letzten Ausgabe übersetzt und bearbeitet von Otto Weber*, Neukirchener Verlag, 1963/1955, S.1043.

われる。そして、これまでの本稿の流れからすれば、その支配者である「王」は侵略される国にいかなる支配の正当性も持っていないまさに「僭主^{ティラヌス}」である点で「盗賊」とは性格が異なりながら同じでもある。

(2) アルトジウスの国家論における「僭主^{ティラヌス}」侵略の位置づけ

アルトジウスは、私たちがすでに見たように、その『政治学』（1614年）第38章第68節⁽¹²⁴⁾において「僭主^{ティラヌス}」が外国からの侵略者に対して述べられていたことを想起できる。これはカルヴァンが「盗賊集団」として述べていたこととまったく同じである。それゆえに、トマス・アクィナスやバルトルスが言及していた侵略がアルトジウスの国家論の中に位置付けられたというべきである。しかし、19世紀から20世紀にかけてかかる侵略への抵抗という法理でバルトルスが見直されてこなかったかもしれない。

2. カントの侵略戦争に関して

カントもまた見直されるべきだと思う。というのは、カントはその『永遠平和のために』の中で侵略戦争に言及しているからである。カントは常備軍の廃止を提案しているがその提案の中にそうはいえない場合のこともいわれている。すなわち

国民が「みずからと祖国を防衛するために、外敵からの攻撃にそなえて、自発的（freiwillig）に武器をとって定期的に訓練を行うことは、常備軍とはまったく異なる事柄である」⁽¹²⁵⁾。

この文章は、国民が「みずからと祖国を防衛するために、外敵からの攻撃に」備えること、したがって、国民は外敵と戦争をすることを含んでいる。とすれば、もはやここでは国内の「暴君^{ティラヌス}」は問題にならず、他国から侵略して来た「僭主^{ティラヌス}」が問題になる。まさに、アルトジウスが述べたように侵略に対する場合にはカントには「僭主^{ティラヌス}」との関係で積極的抵抗を肯定する余地がある。それゆえに、カントを全体としていえば、次のようになるだろう。たしかにカントは抵抗権を認めな

(124) Johannes Althusius, *Politica, Methodice Digesta atque Exemplis Sacris et Profanis Illustrata*, 2. Neudruck der 3. Auflage, Herborn 1614, 1981, p.913.

なお、笹川「国際協調主義と歴史の反省—安重根とカントの思想の比較研究—」、260頁。

(125) カント『永遠平和のために』中山元訳、光文社、2006年、153頁。笹川「安重根の裁判—安重根とカントの思想の比較研究」李泰鎮＋安重根ハルビン学会（編著）、勝村誠＋安重根東洋平和論研究会（監訳）『安重根と東洋平和論』日本評論社、2016年272頁。

かったが、それは「^{ティラヌス}暴君」との関係においてであって、「^{ティラヌス}僭主」との関係においてではなかったと。

もう少し踏み込むなら、カントは、常備軍の全廃の原因のもう一つとして次のようにいう (wozu kommt, daß …)⁽¹²⁶⁾。すなわち、人を殺害する (殺害される) 機械や道具として「雇われる」そういうように人間を使用することは、**das Recht der Menschheit in unserer eigenen Person** と「まことに一致しない」。このドイツ語句の諸訳はその間に一定していない。**Person** を「人格」と訳す多数に対して高橋訳は「吾々個人の中に存する人格の権利」⁽¹²⁷⁾ というように **Person** に「個人」を当て **Menschheit** を「人格」と訳す。さて、木村・相良『独和辞典』1940 年は、in [eigner] **Person (selbst)** を「自身で、自ら」と訳すのに倣うと、in **unserer eigenen Person** をたんに複数形の意味で「自己の」と訳せる。そして、**Menschheit** は幅広い言葉であるが同辞典にならって「人たること」と訳すと、前出の句は「自己の人としての権利」とでも訳せる。そうすると、カントが引き続き、かかる権利と侵略戦争に備えて「自発的に」(**freiwillig**) 武器をとることは「まったく異なる」(**ganz anders**, in: Kant, Werke, S.198) というとき、「自発的」とは「人たること」の核心部分であろうから社会契約の前提をなす自己保存とかかわるに違いない。そういえるなら、自己の命の売買は自己保存と相容れないことは明らかである。

それにもかかわらず、アメリカ、アフリカ、アジア諸国などへの西洋の侵略の場合に、侵略された国家と人々にとって西洋諸国は「^{ティラヌス}僭主」になるからそれへの積極的抵抗の可能性がいわれるべきであろう。ところが、この場合について、カントは、わずかに中国と日本が鎖国制度をとったことを「賢明」であったといい、西洋諸国の圧倒的な軍勢力による「征服」(**Erobern**) を事実として叙述するにとどまっている⁽¹²⁸⁾。それゆえに、規範論として侵略に対する積極的抵抗の意義が論じられることはない。しかしカントの平和論は多くの人々に時代を越えて共感され支持されてきたから、カントの意義は低くは捉えられない。20 世紀後半になっ

(126) Immanuel Kant, Zum ewigen Frieden, Ein philosophischer Entwurf, 1795, in: Werke in zehn Bänden, Hrsg. von Wilhelm Weischedel, Bd.9, 1970, S.197f.

(127) カント『永遠平和のために』高橋正彦訳、パンフレット第 46 輯、国際連盟協会、1924 年、6 頁。

(128) Kant, Werke, S.216.

て世界は脱植民地ないし植民地支配の清算を課題とするにいたったとき、「僭主」^{テイラヌス}論も新たな展開があったに違いない。それを次にみよう。

3. 「レジスタンス」と義兵としての安重根

(1) 「レジスタンス」の項目の登場

新村猛は「レジスタンス」の解説において、第2次大戦中におけるフランス人民のドイツ占領軍およびヴィシー対独協力政府に対する抵抗・抵抗運動（レジスタンス）のみならず東ヨーロッパ諸国民がドイツ占領軍および自国の対独協力政府に行ったところや解放と独立のための反対運動を概観している⁽¹²⁹⁾。これはまさに「僭主」^{テイラヌス}に対する戦いであつたと総括できる。しかし、蠟山芳郎が「朝鮮独立運動」の項目を担当したためであろうが、新村は、日本の軍国主義と戦った極東のアジア諸国なかんずく韓国の独立運動や大韓民国上海臨時政府に言及していない。今日改めて東西のファシズム・ナチズム・軍国主義に対する戦いの歴史認識が不可欠に思われる。

(2) 侵略への抵抗：安重根

この点で安重根が行なった伊藤博文殺害は、安の訊問調書に見られたところからするなら、彼は義勇兵として戦闘状態の中で、それゆえに「公的な權威」のもとに殺害を実行したと解されるべきだろう。「私的な權威」ならそれは「僭主」^{テイラヌス}に対する殺害とはならないが、公的な權威に基づくなら「僭主」^{テイラヌス}に対する殺害となるだろう（フィンケやドゥール説から見た時）。それだけでなく、篡奪者を強調して伊藤をとらえるならその殺害は安重根だけでなくだれでもおこなえる「僭主」^{テイラヌス}に対する殺害となるに違いない（ショウエンシュテット説から見た時）。しかし、この篡奪者説はフランスにおける大逆罪論と連動していたから、その条件が欠けていたところでだれでもが「僭主」^{テイラヌス}に対する殺害を行なえるといえるかどうかには今一つ論証が必要という声がありそうである。たしかに、フィンケにしるショウエンシュテットにしる大逆罪の条件をもって叙述していたが、しかしながら、本稿が検討したバルトルスに基づきながら侵略に抵抗を認めるカルヴァン、『ヴィンディキアエ』、ボダン、そしてアルトジウスは、さらにはカントも、人民と称号を欠如

(129) 新村猛〔レジスタンス〕：下中邦彦編集兼発行者、中村哲・丸山真男・辻清明編集委員著『政治学事典』平凡社、1964/1954年1388–1389頁。この論稿は日本では珍しい。

した僭主^{テイルマス}との間には何らの法的前提すなわち制約を認めていないから、したがって、法的関係を前提する大逆罪とは関係なく、称号を欠如した僭主^{テイルマス}の殺害をすべての人々に認めていたといわざるを得ない。それゆえに、安重根の伊藤博文殺害は、19世紀から20世紀にかけての侵略、帝国主義的植民地支配に対する西欧の抵抗権の思想的王道において肯定されるのである。

(3) 今日の日本への問いと抵抗の基礎

① 安倍政権・日本会議の憲法改正論と日本国憲法 99 条の憲法尊重擁護義務

日本では特にこの大きな流れが意識されるべきである。なぜなら、日本は侵略をしなかったという宗教的政治的集団が、自民党政府に強い影響を与えていて、日本国憲法の改正を目指し（前文の「国際協調主義」の削除を含む）、侵略を支えた明治憲法の復元をはかっているからである⁽¹³⁰⁾。

そこで、安重根に関する研究から侵略への抵抗権の問題を日本に即しても若干であれ述べるべきを得ない。それでは憲法学が抵抗権を日本国憲法に基づいて考えるとすれば何が課題であるだろうか。

私は、これまで本稿で論じたところから言えば、抵抗権の思想の歴史において、抵抗権は二つの内容・局面をもっていることを知った。一つは本稿の主たる関心から検討した侵略に対するものである。もう一つは本稿ではわずかにしか検討できなかったが、正当な支配者がその権力を「濫用」(abutor)した場合である。成文憲法による権力の抑制あるいは拘束という近代立憲主義をまだ知らなかったトマス・アクィナス、『ヴィンディキアエ』、ボダン、アルトジウスはそれぞれの時代において支配者を抑制しようとして「濫用」論を展開したと解することができる。たしかに『ヴィンディキアエ』に見られたようにモナルコマキは支配者の殺害を肯定したが、それは侵略者に対してであり、権力を濫用した支配者の殺害は否定した。しかし濫用を防ごうとしてさまざまな制度化（護民官、エポロイ、裁判所など）が図られた。カントは抵抗権を否定したがそれは殺害の否定であって、彼は殉教を覚悟して権力に不服従の姿勢で自己の主張を続ける。繰り返して言うが、これをカントの道德のダイナミズム、現代なら表現の自由の行使に他ならないといいたい。そうした時代と異なって現代では成文憲法による権力の抑制という近代立憲主義が

(130) 参照：菅野完『日本会議の研究』扶桑社新書、2016年。『週刊金曜日』成澤宗男編著『日本会議と神社本庁』(株)金曜日、2016年。

実現している。時代を超えて権力の抑制は課題である。

そして、日本では抵抗権というと「政府の権力行使が圧制である場合、これに対して積極的あるいは消極的な不服従の態度をとること、つまり反抗あるいは抵抗を行うことが許される」のは「どのような場合」⁽¹³¹⁾ かに関心がある。

私は天皇をはじめとして議員等公務員は、憲法 99 条による憲法尊重擁護義務を負うことをまず考える。その点で議員は国民一般とは異なる。国民一般は憲法尊重擁護義務を有しないからである。したがって、国民一般の自由権利の制限の問題と同じように議員の活動の制限の問題を考えない。むしろ制限に関して国民一般と議員とは区別され、同列ではないことを強調したい。ただし、議員は、公務員といってももともと国民であるから憲法の保障する自由権利を保持していて、その前提の下で公務員の職種・性質に応じて制約を受けるにすぎない。それゆえに、議員は、例えば国民と同様に憲法 21 条の表現の自由あるいは言論の自由を有するわけではない。国民こそ彼らの権力から自由権利を保障されなければならない。したがって、自ら負った憲法尊重擁護義務と矛盾する主張は、なぜ正当かの弁明は主権者たる国民の前で丁寧に十分なされるべきだと考える⁽¹³²⁾。例えば、憲法の基本原則（国民主権、基本的人権の尊重、平和主義）と矛盾する主張をするならそれは憲法尊重擁護義務に反するから、この場合には個々の議員は、与党議員の多数に隠れないで、憲法尊重擁護義務に反しないと国民に自らの言葉で語るべきである。数の力で

(131) 結城光太郎「抵抗権」芦部信喜他編『演習憲法 新演習法律学講座 1』青林書院、1984 年 117 頁。「許される」とはどういうことか。おそらく違法性なしとして処罰されないことであろう。もし圧制が実定法上のものならその枠自体への挑戦が抵抗権の行使になるから、その挑戦自体無意味で必ず処罰される。しかしながら、結城は、憲法 12 条の「国民の不断の努力」に抵抗権を認め、抵抗権の行使の態様として「原則として違憲法令審査制を活用すべきであって、実力による抵抗はこれ以外に適切な方法がない場合のこととしなくてはならない。人権の保障の途はいたずらに力のたたかいの非平和的手段に訴えるべきではなく、なしうるかぎり理のたたかいの平和的手段をまず選ぶべきだからである」という（同 125 頁）。そうすると、例外として処罰されることを覚悟した抵抗権の行使もまたありうると結城は考えているやに見える。しかしながら、そういう幅広い抵抗権の本質をめぐる解説は彼によって論じられていない。

(132) 宮沢俊義著・芦部信喜補訂『全訂日本国憲法』日本評論社、1978 年 820 頁は「憲法の改正を行うこと、また、それをとなえることは、もちろん、『憲法を尊重し擁護する義務』に反することはない」ということと、「憲法の規定を、その定める手続き以外の方法で変えること、または、それをとなえることは、その義務に違反する」ということとの間に一貫性があるだろうか。

矛盾を押しつぶしても根本的な解決にはならない。なぜなら力は理性や正義を欠くと憲法を支配の道具に貶めるからである。野党議員がしばしば憲法尊重擁護義務に反すると問題提起してきたが、それは、憲法 99 条が法的効果のないものとは思われていないからであって、規範として生きていて、与党が憲法を目的とした支配（憲法に制約された権力行使）に立ち返る機会を与えられたというべきである。

② 憲法 12 条の「濫用」の解釈学説

私は、抵抗権との関係で日本国憲法 12 条の「不断の努力」によって国民は憲法の保障する自由権利を保持しなければならないだけでなく⁽¹³³⁾、同条が自由権利を「濫用してはならない」と定めていることに注目する。たしかに、これまで抵抗権との関係で「不断の努力」が注目されているが、「濫用」が注目されたことはない。むしろ、憲法 12 条自体の法的効果を否定する傾向が強い⁽¹³⁴⁾。というのは、自由権利の濫用のかどで国民一般の自由権利の制限に道が開かれるのではないかという懸念が意識されるからである。しかし、国民一般でなく国会議員の言動ならどうであろうか。

憲法 12 条は自由権利の「濫用」を禁止している。欧米東アジアの憲法にかかる規定は見られない。憲法の制定過程では総司令部案に「濫用」の語句が登場している⁽¹³⁵⁾。国民への自由権利の保障に対応して国民の「濫用」しない義務がいわれたようである。

⑦ 解釈論としてみると、美濃部は基本的人権を「濫用することなく常に公共の福祉の為に利用すべき」⁽¹³⁶⁾であるといい、清宮は「国民各人は、単に、消極的に、自由及び権利を濫用しないばかりでなく、さらに進んで、これを活用し、積極的に、公共の福祉のために利用しなければならない。かくして、はじめて、個人と社会、個と全との調和が保たれる」といい、憲法 12 条は「民主政治における個人の

(133) 笹川「〔憲法 12 条〕自由・権利の保持の責任とその濫用の禁止」『別冊法学セミナー・基本法コンメンタール・〔第 3 版〕』有倉遼吉・小林孝輔編、日本評論社、1986 年 53 頁以下。

(134) 奥平康弘「〔憲法 12 条〕自由・権利の保持の責任とその濫用の禁止」有倉遼吉編、日本評論社、1977 年 65 頁以下。佐藤幸治「憲法 12 条〔自由および権利の保持責任・濫用禁止・利用責任〕」『憲法 I』注解法律学全集 1、樋口陽一他著、青林書院、1994 年 238 頁以下参照。

(135) 佐藤（幸）、前掲、238 頁参照。

(136) 美濃部達吉著宮沢俊義増補『新憲法概論』有斐閣、1961/1947 年 89 頁。

根本的態度」すなわち「心構え」であって自由権利の「内在的限界」を示しているという⁽¹³⁷⁾。したがって、清宮は、美濃部の「濫用」と「公共の福祉」との結びつきを「個人と社会」「個と全」というように、また「濫用」を「消極的」「公共の福祉」を「積極的」というように理念的に対比的な両面において結びつきを解説し、法的効果を同条に認めていない。しかしながら注目したい点は、「憲法の個人主義が個人の利己的恣意を許すものでない」と述べて、所有権は義務を伴う、その行使は公共の福利のためになされなければならないと定めたワイマール憲法に言及していることである。つまり、憲法12条は18世紀的な個人主義的思想から20世紀の社会連帯的思想への転換を反映したものと理解されている。もしも「権利の乱用を戒める近代法学の理論が、ここに、憲法に明文化されている」⁽¹³⁸⁾とするならば、法的効果を否定することと近代法学の乱用の理論とはどのような関係にあるのだろうか。この疑問に答えるものは見当たらない。

そして、『注解』は、ほとんど清宮にならうとともに⁽¹³⁹⁾、「新憲法が単に18世紀的な憲法に止まるものではなく、国家協同体的思想をもそこに内包しているものであることを示した」⁽¹⁴⁰⁾と解説し、憲法12条の「濫用」を消極と積極の両面で分けることも継承している。そうすると、清宮と同じように、『注解』でも法的効果の否定と国家協同体的思想との関係の説明は見当たらない。佐藤（幸）、前掲もほとんど清宮・『注解』にならっている。

④宮沢・芦部⁽¹⁴¹⁾は、清宮・『注解』の解説にならうように見えるが、必ずしもそうではない。というのは、法的効果を否定する文言を示していないだけでなく、民法1条3項の権利濫用の禁止を憲法12条の「濫用」の禁止の「精神にしたがったもの」というので、清宮の述べた近代法学の権利濫用の理論と憲法12条の濫用の禁止との結びつきを示したからである。そして、「濫用」とは、本来の自由権利を超えて「憲法がそれらを保障した目的以外の目的のために使うこと」とであると解釈している点において法的効果を検討することの可能性を示した。そのために、民

(137) 清宮四郎『憲法要論』法文社、1952年72-73頁。佐藤功『憲法』ポケット注釈全書(4)、有斐閣、1955年101頁も清宮に同旨。伊藤正巳他『注釈憲法』有斐閣新書、1976年40頁。

(138) 前掲、71-72頁。

(139) 『注解日本国憲法』上巻、法学協会、有斐閣、1963/1953年334頁。

(140) 前掲、332頁。

(141) 宮沢・芦部、前掲、196頁。

法の権利濫用の禁止は、損害を受けたものの抵抗の基礎になりうると同様にそれに加担する国家権力への批判と抵抗の基礎にもなりうる。憲法 12 条の自由権利の「濫用」にも同じものを読みとりうる。

⑦ 鶴飼⁽¹⁴²⁾は憲法 12 条を解説して「国民が、自己の努力によって、基本的人権が国家権力によって侵害されないように、これを保持していく責任があることを宣言したものであって、公共の福祉の名によって、国家権力がこれを制限してもいいという趣旨の規定ではない」といっていて、憲法 12 条の不断的努力を抵抗権のかわりで注目している。ところで、「資本主義の発展とともに、その無制限な享有は、かえって社会に救いがたい害悪を生ずることが明らかになった。したがってそれに一定の制限を加えることが、公共の福祉の要求するところ」であるというから、「公共の福祉」は「社会的な利益」ととらえられている⁽¹⁴³⁾。そうすると、鶴飼は明言しているわけではないが、自由権利の「濫用」の禁止もまた、「社会的な利益」からの自由権利に対する一定の制限の要請となるだろう。すなわち、「公共の福祉」が戦前におけるように国家権力に都合のいい自由権利の制限の根拠となるものでなく、資本主義社会における弊害を受ける多数人の「社会的な利益」という実質的なものと理解されることに応じて、自由権利の制限の根拠としての「濫用」もまた社会的なものに据えられたのである。公害の規制、環境権の主張、基地に悩む住民の平和的生存権、ヘイトスピーチ、これらを考える手がかりとしても「濫用」は役立つ。国民個人であれ、国民に名を借りた国家権力であれその行為を「濫用」として、「社会的な利益」を損なう者への抵抗が可能になる⁽¹⁴⁴⁾。宮沢・芦部と鶴飼は相当に接近していると考える。

③ 議員の法的性格の吟味—「濫用」の実例と政治的義務の実践

1955 年日本民主党と自由党の合同による自由民主党創立に成功した鳩山一郎(1883–1959) 首相は、自分としては「日本が陸軍を持たない、海軍を持たない、飛行機を持たないという憲法には反対なのでありまして、日本自身は自衛軍を

(142) 鶴飼信成『憲法』岩波書店、1956 年 73 頁。

(143) 前掲、76 頁。

(144) 本稿の主題に属しないので、次のことだけ触れておきたい。すなわち、鶴飼の「公共の福祉」論と宮沢・芦部の「公共の福祉」論（基本的人権相互の衝突の可能性の調整原理）との間には隔たりはある。しかし、宮沢・芦部が「参政権および社会権」の保障の場合には「基本的人権の実質的な保障を狙いとする」「自由国家的公共の福祉」をいう（宮沢・芦部、前掲、200 頁）ときには、両者は相当に接近している。

持つ方がいい」と発言した⁽¹⁴⁵⁾。参議院議員が鳩山首相に対して問責決議案を提出した。与野党政府間で折衝があつて鳩山は衆議院では「現行憲法は当然順守する」⁽¹⁴⁶⁾と申明して問責決議は回避された。しかしながら参議院では憲法尊重擁護義務と「憲法改正についての意見を論議するのとは別である」といった⁽¹⁴⁷⁾。それゆえに、鳩山は本当には何を言っているのかははっきりしていない。今も、土屋正忠議員は「言論の自由があつて、国会では、国権の最高機関として何者〔に〕も縛られず、法と良心と信念に従つて質疑が行われるべきである⁽¹⁴⁸⁾」といっている。今日このような言論の自由の理解は安倍首相をはじめ憲法改正をしようとする議員には当然と思われている節がある。しかし、安倍政権と日本会議には議論を回避する傾向がありそうである。

例えば、鳩山と同じように、安倍首相にも憲法尊重擁護義務に関して曖昧さがつきまとっている。2016年の参院議員選挙におけるように、選挙で憲法改正は争点から外され、世論は安倍政権の意図する方向に誘導された。そして、安倍首相は圧勝した選挙後にはあたかも憲法改正が選挙の争点であったかのごとく憲法改正を主張した。そのように、憲法尊重擁護義務と憲法21条の言論の自由との関係は憲法改正をめぐる緊迫した争点になっている。安倍首相は、国民に判断してもらうために情報は提供したいという趣旨のことは折々いっているが、それは極めて恣意的で何を提供するか、どれほど提供するか、いつ提供するかを、自己の政策実行の有利不利の判断に基づいて決めていて、決して主権者たる国民の判断に資することを第一義として行動しているわけではないことを知らなければならない。戦前の大本営の情報操作とどこが違うだろうか。憲法改正が国民投票によって決せられるとするなら、国民投票を左右するところに、国民ではなく、安倍首相が立っていることを見落とすわけにはいかない。

国民一般ではなく権力を有する議員が何を言ってもいいとはいえない。国権の最高機関である国会を自らの目的のために利用し、憲法の保障する人権を支配の道具に利用するなら、その言動は、権力に対する国民の自由権利の保障という本来

(145) 1956年1月31日参議院会議録5号8頁。

(146) 1956年2月3日衆議院運営委員会議録8号2頁。

(147) 1956年2月2日参議院会議録7号4頁。

(148) 2013年5月16日第183回国会衆議院憲法調査会議録第9号11頁。「〔に〕」は笹川の補いである。

の目的を超えている⁽¹⁴⁹⁾。そうであれば、議員の活動を批判的に見る視点として「濫用」は使えるであろう。憲法 12 条の「濫用」は権力に対する抵抗の一つの足掛かりとなる。

言い換えるなら、小林（直）⁽¹⁵⁰⁾は、憲法尊重擁護義務を「不断に政治の場で確かめることによって、国民がその実効性を担保してゆく」ものという。そして、法的サンクションに結びつかないかぎり、その義務は「道徳的・政治的」なものにとどまるともいう。私は、「政治的」な義務という言い方に興味を持つ。なぜなら「不断に政治の場で確かめる」ことによって国民が「実効性」を担保していくことができるからである。こういういわば日常的な積み上げなくして一挙に法的サンクションも抵抗も実ることはないだろう。それゆえに、憲法 99 条と 12 条とは日本における抵抗権のあり方の一つと解される。結城が恐れた極限的な実力行使だけが抵抗権の行使のあり方ではなく、そこにいたる手前に抵抗のたくさんの可能性を開発する必要があると考える⁽¹⁵¹⁾。

(149) 笹川「憲法訴訟の原点」、前掲、65 頁参照。判例でいえば、ポポロ事件東京地裁判決 1954 年 5 月 11 日判時 26 号 3 頁の「官憲の違法な自由侵害行為を排除し、阻止するという意味をもつ行為」という抵抗権にかかわる言及は注目される（山内敏弘〔抵抗権〕杉原泰雄編集代表『新版体系憲法辞典』青林書院、2008 年 266—267 頁参照。なお、山内「国家緊急権と抵抗権」阿部照哉編『憲法 判例と学説 1』日本評論社、1976 年 59 頁は、実定法上の抵抗権を国民主権に基づく抵抗権と人権に基づく抵抗権に言及する）。そして、チャタレー事件最高裁判決（1957 年 3 月 13 日刑集 11 卷 3 号 997 頁）は、憲法 12 条の「濫用」の禁止を法的効果のないものとは言わず自由権利の制限の根拠としている。加持祈禱事件最高裁判決（1963 年 5 月 15 日刑集 17 卷 4 号 302 頁）も憲法 12 条 13 条を「教訓的規定というべきものではない」という。しかし、これらの最高裁判決はあくまで国民一般の自由権利の制限の視点で憲法 12 条に言及して、憲法 12 条の法的効果を指摘している点は別として、私のように国民と憲法尊重擁護義務を負う議員との相違という広がりを示してはいない。

(150) 小林直樹『憲法講義』上、改訂版、東京大学出版会、1973/1967 年 271 頁。

(151) 古川純『基本的人権』竹前栄治監修『日本国憲法・検証 資料と論点』第 4 巻、小学館文庫、2001 年、37—38 頁は、鈴木安蔵の憲法草案の抵抗権を紹介する。鈴木案は二つの項目（以下前者後者と呼ぶ）からなる。すなわち前者「官吏、国民の自由を抑圧し権利を毀損するときは、これを排斥訴追するを得」は受動的な抵抗権に、後者「政府、憲法にそむき、国民の自由を抑圧し権利を毀損するときは、国民これを変革するを得」は積極的な抵抗権に属すると思う。たしかに古川が指摘するように、後者は「革命権」といえるだろう。前者は、「革命」にいたる手前の権利侵害に対応する「排斥」と「訴追」を取り上げていて、私が「濫用」で論じてきたところとある程度重なるのではないかと考えるが、しかし、鈴木の前者は、おそらく最終的には法的サンクションを想定していっそう強力に思える。すでに紹介したポポロ事件地裁判決はこの「排斥」

さて、最後に付記したいことが二つある。

一つには、「僭主」^{テイラヌス}論は、今日の国際法学でも肯定的に取り上げられている⁽¹⁵²⁾。内容上バルトルスの「僭主」^{テイラヌス}と「暴君」^{テイラヌス}の二つの考え方が述べられているがバルトルスの名前は見当たらない。

もう一つには、21世紀の現代国際政治の状況を見ると、アメリカとその有志連合はイラクが大量破壊兵器を保持しているという理由でイラクを攻撃しフセインの憲法体制を破壊した。イギリスではその保持には理由がなかったと反省の報告が議会で寄せられた。日本はアメリカに追随しながらその開戦理由についていまだに何も反省の議論が国会ではない。そのように、まさに大国による僭主^{テイラヌス}の事態は今も起きている。そのために、バルトルスの時代の議論が今日でも通用するというなら、それは、彼の理論の透徹さを学ぶと共に進歩のない恐ろしい歴史の現実を知ることにもなりそうである。

（明治大学法学部元教授）

の形態に注目して抵抗権を考えたかもしれない。

(152) P. H. Kooijmans, Protestantism and the Development of International Law, in: Recueil des Cours, 1976, IV, Tome 152 de la collection, 1980, p.100.